犬鬼人随想録　～蒼き牡丹外伝～

皆麻　兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
犬鬼人随想録　～蒼き牡丹外伝～

【Ｎコード】
Ｎ９０６１Ｘ

【作者名】
皆麻　兎

【あらすじ】
「里見八犬伝」の主役とも言える八人の犬士達。
彼らは、一人の少女との出会いで、それぞれの旅に多くの可能性を持ち始める事となる。その名は三木狭子（みききょうこ）。５００年以上先の未来から来たという彼女は犬士達と旅をし、最終的には犬塚信乃と結ばれる事になる。一方で、犬士達に限らず、彼女の周囲に現れる人物にも何かしら影響を与える事となる。
これは、犬士を含むいろんな者達が、彼女とかかわった事を思い出し、それを記した記録であった――――――――――――

これは、２０１１年６月に完結した『八犬伝異聞録　蒼き牡丹』の外伝をまとめた作品です。

プロローグ（前書き）

はじめましての方もいるかもしれません。
作者の皆麻　兎と申します。
この度は、『犬鬼人随想録　～蒼き牡丹外伝～』にアクセス戴き、誠にありがとうございます。
当作品は、完結した『八犬伝異聞録　蒼き牡丹』の番外編を収録した作品となっています。
『蒼き牡丹』では主人公である現代の女子高生・三木狭子の視点で描かれましたが、当作品は、同作品に登場した里見の八犬士や、それ以外の登場人物の視点で物語が進んでいきます。
視点は章ごとに変える予定ですので、宜しくお願い致します。
また、当作品は『蒼き牡丹』を犬士達の視点で一部描いたりなど、多少のネタバレがあります。
『蒼き牡丹』をご一読されていない方は、そちらの方を先に読まれてからこちらを開くのが良いかと思われます。

プロローグ

「現在(いま)って…何年？」

今でも思い出せる、その娘の第一声。

某――――――――犬塚信乃戌孝(いぬづかしのもりたか)は、滸我(こが)におわす足利成氏(あしかがしげうじ)公に仕官するため、故郷・大塚村から旅を始めていた。

その娘と出逢ったのは、道中で通った円塚山(まるつかやま)での山中。道端に倒れていた娘を初めて目にした時、ひどく驚いたのをよく覚えている。

「浜路…？！」

異風の体(てい)に尼のような髪。見た事のない装束を身に着けていたのにも驚いたが、何より印象的だったのは…故郷に残してきた許嫁・浜路(はまじ)と顔がうり二つだという事実だった。

その後、その娘とは滸我へ着くまでの道中を共に旅して一旦別れる事となる。名は三木狭子(みききょうこ)といい、姓を持つからにはどこかの武家出身の姫かと思いきや…本人が申すには、５００年以上先の世から来たという。

滸我までの道中は、あまりに目新しい出来事が多くてよくは考えていなかったが…この狭子との出会いが、己の生き様を大きく変える運命的な出会いになろうとは、当時は全く考えていなかった某であった――――――――――――――――――――

プロローグ（後書き）

いかがでしたか。
このプロローグでわかる通り、最初は犬士の一人・犬塚信乃の視点で物語を進めていきます。なので、第１章か彼の章といったかんじ？
今後の展開として考えているのは、犬飼現八編や犬江親兵衛。悪役だと蟇田素藤辺りのを考えています。
それと、本当の意味で言える”番外編”として、『蒼き牡丹』のキーパソンであった少年・染谷純一の物語も書きたいな～とか考えています。
…それを実行に移せるのかはわかりませんが…

本業も忙しいので、こちらは少しずつ更新していこうかと思います！
さて、次回から第一章に当たる『犬塚信乃編』になると思いますので、よろしくお願いします（＾＾

第1話　”先の世から来た娘”と出会って（前書き）

この第1章では、八犬士の一人・犬塚信乃の視点で話を進めます。

第1話　”先の世から来た娘”と出会って

「まことに、あの女子は肝が座っておる…！」
某が部屋に入ると、小文吾が妹の沼藺(ぬい)殿とそのような会話をしていた。
「おお…信乃！」
こちらに気が付いた彼は、屈託のない笑顔を見せる。
許我(こが)へたどり着いた某は成氏公に謁見をするが、あらぬ疑いにより追われる身となってしまう。芳流閣で死闘を繰り広げた男・犬飼見八(いぬかいけんはち)と共にその場から川に転落し、流れ着いた先は利根川付近にある町・行徳。そこで宿を営む犬田小文吾(いぬたこぶんご)と沼藺の兄妹に助けられる。しかし、匿ってもらってからまもない頃に、某は生死の境をさまよっていたのだが――――――――――――――――
「何故、あの娘は某を救ってくれたのであろうか…？」
某は隣部屋の襖を見つめながら呟く。
“誰かを助けるのに理由がいるのか？”…だそうだ」
「見八…？」
部屋の壁に寄りかかりながら、見八が一言呟く。
「わしが“破傷風にかかった貴様を何故、救おうとするのか”と問うたら、そのような答えが返ってきたのじゃ」
「…助ける…理由？」
「左様。おそらく…あの娘にとって、死にそうな命を救う事は、人の子として当たり前と考えてるのやもしれん」
「人助けが当たり前…」
その言葉は、普通であって普通でない。
…戦のないという時代から参ったからなのか…。それとも…？
某は狭が申していた台詞の真意を考えていた。しかし、今思えば…彼女の純粋でまっすぐな精神(こころ)ゆえの言葉だったのだと実感ができる

のである。

そしてこの会話から数時間が経過した後、狭が目を覚まし、某や現八――――――――この時はまだ“見八(けんはち)”と名乗ったおった若者。そして、小文吾や妹である沼藺殿は、丶大法師(ちゅだいほうし)と名乗るご出家から、己らが持つ宿命の話を聞くこととなる。この行徳へたどり着くまでの間、法師殿は狭と共に旅をしてきたという。また、狭となぜ行動を共にしていたかも語ってくれた。

「…では、拙者はこれにて」

「法師様！お気をつけて…！」

その翌日、行徳を出る前に我らは法師殿の出立を見送った。

ただし、某と見八は許我(こが)での一件でお尋ね者となってしまったので、法師殿の見送りは小文吾と狭がしていた。

「狭子殿を宜しく頼みます…か」

「？どうした、信乃？」

「…いや」

古那屋の入り口付近にいた某に、現八が声をかけてくる。

我ら3人は、法師殿から託されたという事もあり、狭子と行動を共にする事となる。今まで女子(おなご)を連れての旅をした事がなかったので、この先はどうなるかと考えていた。

浜路(はまじ)…。息災であろうか…

それと同時に、故郷である大塚村に残してきた許婚・浜路の事を考えていた。おそらく、狭の顔があの娘と瓜二つ故に思ったのかもしれない。

「ん…？」

気がつくと、現八が深刻そうな表情をしながら、周囲を見渡している。

「現八…どうしたの？」

見送りから戻ってきた狭が現八を見て、不意に声をかける。

「…お主か」

狭の存在に気がついた彼は、我に変えったような表情で口を開く。
「何やら、誰かに見張られているような気がしたのだが…。どうやら、気のせいのようじゃな」
フッと横目を向いた現八だったが、すぐにいつもの表情に戻った。
「相変わらず、お主は仏頂面のままじゃのう！少しは信乃を見習ったらどうだ？」
「…余計なお世話だ」
何事もなかったような顔で話す小文吾の台詞に、少し不快だったのかそっぽを向いてしまう現八。
そんな彼らに複雑そうな笑顔を見せる狭。それでも、某にとっては一時の安らぎともいえる時間であった。しかし、この時に現八が感じ取っていた気配の正体を、この後の旅で知ることとなるのであった――――――――――――

「あれは…！？」
この台詞を某が口にしたとき、視界に入ってきた光景に驚いていた。己に義兄弟であり、４人目の犬士・犬川荘助義任（いぬかわそうすけよしとう）を迎えるために大塚村付近へ我々は向かった。そこで彼が牢に繋がれた話を聞き、助け出すためにと数日をかけて情報収集を行っていた。その最中、拠点としていた場所で狭や現八が謎の輩に襲われる。
「信乃！あれは、狭子ではないか！！？」
この時、共に偵察へ行っていた小文吾が、ある方向を指す。
「！！！」
群青色の髪をした忍びと刃を交える現八を目の当たりにした某は、その少し離れた所に、白髪の男と共にいる人物――――――狭の後姿が目に入る。
我らのいた場所は彼らから少し離れていたため、何を話しているのかは聞こえない。しかし、彼女の後姿を見る限り、狭は白髪の男に右腕を掴まれているようであった。

「狭！！？」
すると、男は右手で狭の首筋に一撃を加えて気絶させてしまう。
右腕だけが吊り上げられている状態になってしまった彼女を、己の右腕で抱えようとする白髪の男。
「…っ！！」
この事態を某と同時に、現八も気がついていたと思われる。
しかし、彼は別の敵と戦っているため、狭の所へはなかなかたどり着けない。「このままでは狭が攫われる」と直感した某は、敵の元へ走りながら、脇差・桐一文字を抜いた。
キィィィン
刀と刀の交わる音が山林中に響く。

その後、何とか狭が連れ去られる事なく、その場は収まった。
「狭…！どこも怪我はないか…！？」
敵が去った後、地面に座り込む狭の側に駆け寄る某や現八。
“純一を知っている”…って…どういう…こと…？」
「狭…？」
当の彼女は、某達の声が聞こえていないらしく、よくわからぬ台詞を呟きながら呆然としていた。
…よほど、怖い想いをしたのだな…
某は無意識の内に、狭の肩に右手を添えていた。その時、彼女の身体が小刻みに震えていたのを感じたからである。
「…兎に角、移動するぞ。小文吾、有力な情報は得られたのだろうな？」
「ん…？ああ！じゃあ、この場を移動してから、俺らが得た情報を話す！」
状況を察したのか、刀を握る右腕を押さえていた現八が小文吾に声をかけ、某達と狭はその場を後にする。
「…これから、永い語りとなるでしょう。それは、私が人の子では

ない…“鬼”という生き物だからです」

「！！？」

この台詞は、荒芽山(あらめやま)で出会った老女・音音殿(おとね)が申した台詞である。

荘助を助けた後、次なる犬士・犬山道節忠与(いぬやまどうせつただとも)を迎えるため、白井へと向かった。その道中で彼の仇討ち騒動に巻き込まれ、関東管領・扇谷定正(おうぎがやつさだまさ)の家臣達と刃を交える事になる。その後、単節(ひとよ)と名乗るくの一の手引きで、音音殿と出会う事となる。

彼女は狭が“先の世から来た娘”である事を知っていたらしく、神霊と成られた伏姫様の事や、己らを含む“鬼”の存在について語ってくれた。

あの時、狭を連れ去ろうとしていた白髪の男…。あれが蟇田権頭(ひきたごんのかみ)素藤(もとふじ)というのか…

この時、そのような事を某は考えていた。また、それと同時に、何故に彼女を連れ去ろうとしていたのか…その真意がますますわからなくなってしまった。

この後、残る犬士を探すため、3つに別れて旅を再開する事になる某達。その内訳は、下野国に現八と狭子。そして某が向かう事に。次に武蔵国へは、荘助と小文吾。新たに仲間となった道節は独り、許我(こが)へと情報収集のために向かった。

この時は許婚を失った悲しみでそれどころではなかったが…これまで以上の謎とその答えが、その先の旅で待ち受けていようとは、微塵も思っていなかったのであった――――――――

第1話　”先の世から来た娘”と出会って（後書き）

いかがでしたか。
本編では第2章～3章の間をスピーディーにまとめたかんじです！
ちょいとまとめすぎたかなとも思いましたが、狭子が素藤らに襲われている所をずっと狭子以外での視点で描きたかったんで、ここを描けたのはよかったと思います。
同じ物語でも、視点を変えるとこんなにも違うんだと実感。笑

さて、物語の方ですが…
実は、話の中に出てきた信乃の脇差・桐一文字とは、実際に原作（＝南総里見八犬伝）でも彼が使用していた刀。ただ、この時はまだ名刀で有名な村雨丸を持っていなかったので、この脇差を使ったという次第になります。

さて、次回は本編では第4章辺りの所からスタートします。ここからだんだん深くなるであろうと思いますので、原作との違いを見せながら書いていきますんで、よろしくお願いします（^^

今作品は外伝となりますので、作品としてはさびしいかもですが、宜しければご感想を戴ければ幸いです。
よろしくお願いします！

第2話　深まる謎と降りかかる危機（前書き）

ここで大角を”角太郎”と書いていたりもしますが、後者は大角の幼名みたいなものなので、決してスペルミスとかではありません。…念のため、お知らせしときます。

第2話　深まる謎と降りかかる危機

荒芽山での一日が終わり、我らは3つに分かれて犬士探しの旅を再開する。下野国へ向かう事となった現八・狭子・某の3人は、道中…上野国と下野国の国境にある集落・猿石村で一宿取る事と相成った。

村にたどり着く前に狭が妙な事を申していたが、その日の夜…泊めて戴いた村長の家にて、思いもよらぬ出来事が起こったのである。

「信乃様…」

「…！？」

風呂からあがったため、黒い髪が半渇き状態の狭。

そのいくらか艶っぽい彼女の口から、普段は口にしないような申し方で、某の名を呼ぶ。

…何か様子が変だ…。それに、狭は某の事を“様”づけで呼ばないはずだし…

「…！！」

一つの可能性が頭に浮かんだ某は、驚きの余り後ずさりをする。

「お主…まさ…か…？」

某は恐る恐る、村雨丸の柄に触れていた利き腕を外しながら、狭に近づいていく。

「信乃様…。私です…大塚村の浜路（はまじ）…です…！」

「！！！」

まさか、誠に…！！

狭の口からこの台詞が紡ぎだされ、その瞬間…某は、彼女の肉体に何かが取り憑いている事を悟る。しかも、それが、己の亡き許嫁・浜路だという事を――――――すると、信乃の心臓の鼓動が少しずつ早くなっていく。

「信乃様っ…！！」

狭子の“中”にいる浜路がそう叫んだ直後、某に向かって走り寄ってきた。
浜路…！！！
この時、一瞬、狭の顔が浜路と重なる。そして、己の胸に飛び込んできた彼女を強く抱きしめた。“身体は違えど、この感覚はまさに浜路である”――――――――それを己の身で体感する信乃。
「私…ずっと…信乃様にお会いしとうございました…！」
某の胸の中で、浜路が涙を流す。
それを見た途端、今まで抑えていた気持ちがあふれ出してきた某は、狭の背中に腕を回して、ギュッと強く抱きしめていた。
このまま、時間が止まってしまえばいいのに…
肉体は狭子だが、浜路を抱きしめている感覚に陥っていた某は、すっかりそのような事を考えていた。しかし、今にして思えば…この行為がどれだけ狭子を侮辱し、苦しめていた事か――――――――それについては、今でも後悔している。

「ぐっ…！！！」
この出来事が収まった後――――――普段は無愛想で感情を表に出さない現八が突然、某の頬を殴った。
その勢いで、地面に転げ落ちる信乃。
「何をする…！！？」
何故殴られたのかが解らず、鋭い視線で某は現八を睨みつける。
その隣の部屋では、浜路に取り憑かれたせいで疲れて倒れた狭子が眠りについていた。
「…ふん。死んだ女の事を、いつまでも引きずりおって…！」
「何！！？」
逆上しようとした某を見た現八は、ため息交じりで再び口を開く。
「まぁ、お主がどこの女を想うのは勝手やもしれぬが…」
「…？」
その直後、周囲の空気が変わったような感覚に陥る。

「お主は先ほどの出来事で、狭が取りつかれながらも、意識があった可能性を考えなかったのか！！？」
「えっ…！？」
その台詞を聞いた途端、某は身体を硬直させる。
「それに…お主の態度がどれだけ狭につらき想いをさせているか…朴念仁たるお主には、解せぬであろうな！！！」
「…」
まるで某を殺さんと言わんばかりの形相で、現八は怒鳴りつける。これだけ必死の彼を見たのも初めてだったが…何より、浜路の事を想い、落ち込んでいる自分と、そんな己に側にいてくれた狭の事を思うと――――――――己が情けなく感じるようになる。
「…確かに、現八の申す通りやもしれぬな…」
やっと、自分が殴られた理由を悟る。
“申し訳ない”という気持ちがいっぱいになった某は、すぐさま眠りについている狭の元へと歩き出したのであった――――――――

このような出来事があった後、下野国へ入った某達は、返壁（たまがえし）の里で6人目の犬士・犬村大角礼儀（いぬむらだいかくまさのり）と出逢う事となる。最初、庚申山で化け猫と対峙した某達はその後、大角の父・赤岩一角殿の亡霊から、化け猫が一角殿に成りすまして、大角…この時は角太郎と名乗っていた彼や彼の妻・雛衣（ひなきぬ）殿にひどくあたりちらしている事を知る。
「どんなに…どんなに…無念であった事か…！！」
父親の骨を握りしめながら呟く大角の瞳には、大粒の涙が流れていた。
狭や雛衣殿の活躍もあって、某達は一角殿に化けた化け猫を退治する事に成功する。しかし、これによって永遠に父を失う事となった大角は、悲しみの余り、地べたに座って嘆いていた。その光景は…

幼き頃、母・手束(たつか)を失った時の己にそっくりであった。
「うぅ…ぅ…」
周りを気にせずに泣き続ける大角を見た狭は、自分の事のように涙を流し…現八も、少しつらそうな表情で見下ろしていた。
「角太郎殿には、俺たち兄弟がついている…。これが、その証じゃ…」
静かな口調で語る信乃は、大角に「礼」の文字が浮き出た水晶玉を渡す。
その直後、自身の懐から「孝」の字が出る玉を取り出して、彼に見せた。
このような悲しき別れ等がありながらも、某達の犬士探しの旅は続く――――――――――

その後、狭子が持つ能力・千里眼（＝遠くの物や、本来なら見えぬ物も見える能力）によって武蔵国へ向かった荘助達の現状を把握したり、道中で九尾の神狐・政木狐との出会いもありながら、某達は、武蔵国・穂北で一度再会を果たす事となる。
狭の持つ千里眼にも驚きだが、彼女に対する謎は深まるばかりだ。そもそも、巫女の家系でもなしにそのような能力を持つはずもないし、道節を探す時に見せた蒼き光など…彼女に対しては、解せぬ事が多い。また、各々の情報を共有する中、蒼血鬼（＝血を食らう鬼の事）・蟇田権頭素藤(ひきたごんのかみもとふじ)や足利公や関東管領の裏で暗躍する妖しき尼僧・妙椿(みょうちん)らの名も耳にする事となる。
そんな中、穂北へ向かう途中ではぐれた7人目の犬士・犬坂毛野胤智(いぬさかけのたねとも)を迎えるため、鈴茂林(すずのもり)へ向かう事となる。向かったのは某・荘助・小文吾・現八・大角・道節と狭を含めた7人。犬士も毛野を含めて、あと2人という所までうまく事が進んでいた。
しかし、その鈴茂林(すずのもり)にて、新たな戦いと思わぬ危機が待ち受けていた。

「はっ！！！」
「ふんっ・・・！！」
林中は一つの戦場と化していた。
叢に隠れて、毛野と彼の父上を手にかけたという籠山逸東太縁連（こみやまいっとうたよりつら）が一騎打ちを繰り広げる中…某達には、蟇田素藤に仕える蒼血鬼・牙（が）静（ぜい）と、妙椿の刺客と思われる黒ずくめの者達の襲撃に遭う。
素藤から狭子を連れてくる命を受けていた牙静という男は、すぐさま彼女を捕らえようとするが、某が間に入る事で戦いの火ぶたが切られる。この漆黒の着物をまとった敵は、刀を使わずに戦う丸腰状態だが、鬼であるせいか、某の一撃も見事に防御してくる。
「妙椿と手を組んだり、狭を狙ったり・・・。お主達の真の狙いはなんなのだ！！？」
「残念ながら・・・その真意は素藤様しか存じません」
某の猛攻にも、平然とした表情（かお）で対応する牙静。
その後も戦いが続き、両者一歩も譲れない状況となっていた時だった。
「やめてぇぇっ・・・・！！！」
「！！」
突然、少し離れた場所から狭子の叫び声が聴こえる。
「ぐあっ…！」
それに反応した某は、その一瞬の隙を突かれ、腹部に強い衝撃が走る。
同時に、その勢いで近くにあった木まで蹴り飛ばられ、激突する。
「くっ…」
地面に座り込んでしまった某を見下ろす牙静。
とどめを刺されるかと思いきや…彼の視線は別の方へと向いていた。
「ふ…。こんな時に、背中ががら空きとは…。初めて相まみえた時と同じで、隙だらけの娘ですね…」
「！！？」

そんなことを呟いていた牙静は、不気味な笑みを浮かべていた。
「ま…て…！」
その直後、敵は狭のいる方へゆっくりと歩き出す。
立ち上がって追いかけようとしたが…先ほどの攻撃で頭をぶつけたせいか、立ちくらみを起こして、思うように身体が動かせない。腹部が痛く、今にも気絶しそうな某だった。

「信乃さん！！」
「荘助…」
その数分後、意識が少しだけ飛んでいた某は、荘助に名を呼ばれて我に返る。
身体がふらふらしながら顔をあげてみると――――――――――――――――妙椿の刺客を退治した現八らの前に、牙静が立っていた。
しかも、奴の腕の中には…締め上げるようにして捕えられた狭の姿が。
「ああ…あっ！！！」
彼女は某の状態に気が付き、敵の腕から逃れようと試みたようだが、逆に腹を締め付けられる事で、尚更逃れられない状況に陥ってしまう。
「狭っ…！！！」
その苦しそうな表情を見た途端、焦りと憤りを感じた某は、思わず彼女の名を叫ぶ。
意識が朦朧とする中、敵は狭が持つという“三世の姿”の話や、此度の件が妙椿の命令でもある事などを語る。そして、某達の元を去ろうとした時――――――――連れて行かれる事を理解した狭は、必死にこちらに向けて腕を伸ばそうとする。
「信乃…！！皆！！！」
某の瞳に、泣き叫ぶ狭子の顔が映る。
「狭っ…！！！」
彼女の元へ行こうと必死に腕を伸ばそうとするが――――――――敵は

狭子と共に姿を消してしまった。

「くそっ…！」

荘助の肩を借りて立ち上がった某は、絶望と自責の念に包まれていた。

「守る」と決めたのに…なんというザマだ…！！

悔しさの余り、拳を強く握りしめる。

「…おい…」

気が付くと、我ら犬士達の前に、籠山逸東太を倒した毛野が現れる。頬に返り血をつけた彼の手には、狭が持っていたお守り刀と、牡丹花の紋が刻まれた鞘が握りしめられていた。

「貴様らが隠れていたのは薄々勘付いていたが…。今は兎に角、あの女子が連れ去られた所以を説明してもらおうか…！」

そう話す彼の表情は、かなり深刻そうだった。

後で本人から聞く事となるが…どうやら彼は、狭のおかげで命を救われた。そして、親の仇討を成せたらしい。しかし、それもあって逸東太が連れていた牙静に隙を突かれて捕まってしまったため、「自分にも責任がある」と感じて必死のようであった。

しかし、敵の真意がわからぬ某達は、そんな彼の疑問に答えられず黙り込んでしまう。

「若」

「…！曳手（ひくて）か…」

我らが黙り込んでから、いくらか時間が経過した後――――――――――道節の近くに、彼や音音（おとね）殿に仕える忍び・曳手（ひくて）殿が姿を現す。

彼女の登場は、微妙な空気になっていた某にとっては、一種の救いであった。

「…如何した？」

「…“さるお方”からの命にて…若や皆様をお迎えに上がりました」

「“さるお方”…？」

その遠回しな言い方に、首をかしげる大角。

そんな彼に気が付いた曳手(ひくて)さんは、眉一つ変えずに口を開く。
「…それは、安房国を治める殿・里見義実様でございます」
「！！？」

「突然の呼び出し、応じてくれて大義である」
「ははーっ」
その後、曳手(ひくて)殿と共に、某達一行は、行徳へ向かった。
小文吾が営む宿・古那屋にて、義実公との初対面と、大法師(ちゅだいほうし)様との再会を果たす。
挨拶が済んだ後、法師殿の口から里見家が窮地に立たされているという現状などの説明があったが…話はすぐに、狭子への話題へと移る。また、行徳に着くまでの間、毛野には荘助や現八の口から、何故鈴茂林にいたのか等の経緯を説明していた。
「何…？狭殿が連れ去られただと…！？」
「はい…」
某の口から、狭が攫われた事を聞いた法師殿は、目を丸くして驚いていた。
しかし、妙だったのは、その後ろにいた義実公も、ひどく驚いていた事である。それから、荘助や大角が事の経緯を彼らに口頭で伝えた。また、義実公が毛野に直接声をかけて、狭が所持していたお守り刀を見せたりした後――――――――――――――法師殿の口から、衝撃的な事実を知らされる。
「貴方がたが今日まで旅をし、“狭殿”と呼んでいたお方こそ…鷹に攫われて行方不明となっていた、里見の五の姫・浜路(はまじ)姫様なのです…！！」
「なっ！！！？」
法師様の台詞に、某達犬士は、驚きの余り言葉を失ってしまう。
「狭子が…里見の姫…！！？」
某は、とても信じられないような表情で、その言葉を口にする。

しかし、その台詞(ことば)とは裏腹に…今まで狭に対して腑に落ちない事が、全部一つにまとまった――――――――――――――――――――――――そんな感覚も覚えた信乃であった。

第2話　深まる謎と降りかかる危機（後書き）

いかがでしたでしょうか。
今回、『蒼き牡丹』の狭子視線では描ききれなかった部分を存分に書けた気がして、大満足しています♪
なので、内容も密度が濃かったかも…

さて、第1章である信乃編は、3話構成でいくつもりでしたが…このままうまくまとまるのだろうか？という、不安もあり（汗）
でも、構想がゾクゾク浮かんでいるので、頑張ってまとめていこうかと思います！

ご意見・ご感想等がありましたら、宜しくお願いします（＾＾

第3話　守るための戦い

「狭子が里見家の姫である」という驚愕の真実を、犬士(われら)達は法師殿の口から知らされる。初めは言葉を失っていたが、これまで腑に落ちなかった出来事が一つに繋がり、ある意味納得のいく話であった。

蒼き光を放つのも…おそらく、我ら犬士を生み出した伏姫様と同じ血を受け継ぐがゆえなのであろうな…

この時、そんな事を考えていたが…今はとにかく、この苦境を乗り越えなければならない。

「…ここにおりましたか、信乃殿」

「大角…」

とある晩、行徳(ぎょうとこ)付近を流れる利根川の付近で考え事をしていると、古那屋のある方角から大角が現れる。

連れ去られた狭を救うべく、まずは道節に仕えるくの一・単節(ひとよ)を偵察に向かわせた。居所を探るのが一番の目的であり、一方で蒼血鬼・蟇田権頭素藤(ひきたごんのかみもとふじ)らの妨害がないかを確かめる意もあった。

単節殿からの朗報を待つ一方…某と荘助は、道節の口から狭子と彼女が所持していたお守り刀の話を聞いていた。これは、その日の夜の出来事である。

「…眠れませぬか？」

「ああ…。大角もか…？」

「ええ…まぁ…」

某と大角は、空を見上げながら、そのような事を口にしていた。

そして一呼吸程置いた後、大角がこちらを向いて口を開く。

「信乃殿、一つ…確かめたい事がございます」

「確かめたい…こと…？」

彼の思わぬ台詞に、某は首をかしげる。

「貴方と…そして、狭…浜路姫様の事です」
「！」
狭子の名が出た途端、某の表情が少し強張る。
そんな己を横目で見つめながら、大角の話は続く。
「…貴方は、彼女の事をどのようにお思いか？」
「…？」
何を訊くのかと思えば…予想だにしない問いであった。
「…」
某はほんの僅かな間だけ、黙り込んで考える。
「共に旅してきた同志…仲間といった所か」
「…本当にそれだけですか？」
「え…！？」
この時、大角の顔からいつもの穏やかな笑みが消えていた事に気が付く。
そして、彼から食い入るような眼（まなこ）で見つめられながら、時は過ぎていく。
「あの娘は、亡き許嫁と顔立ちがそっくりだが…とても芯の強き女子で…」
独り言のように呟く某の頭の中には、明るい笑顔を見せる狭。泣き叫んでいる所等――――――喜怒哀楽を示す彼女の姿が浮かんでいた。
『ありがとう…』
そして、最後に浮かんだのは…一筋の涙を流しながら笑顔を見せる、暖かい微笑みであった。
　心の臓が強く脈打っておる…。しかも、その脈も速くなりつつある…。これは…
「狭…」
彼女の名を口にした時、某は何かを悟ったかのように空を見上げた。
「…わたしが何を申したかったのか…。諭していただけたかと思います」

空を見上げる某を横目に、大角は穏やかな表情で語る。
彼に問われ、はっきりと悟った己の気持ち。同志や仲間としてだけではない、荘助のように義兄弟としての感情にもあらず…。前向きであり、明朗快活…。そして、純粋な精神(こころ)を持つ彼女を、恋い慕っていた事を――――――――――
「…大角」
「…何でしょう？」
己の元から去ろうとしていた大角を、呼び止める信乃。
大角の方に向きなおした某は、まるで宣言するかのように口を開く。
「某は、狭の事を好いておる。…故に、何があろうともあの娘を魔の手から救い出したい…！！これは、彼女が里見の姫ゆえとか…そのような事は関係なしに…じゃ！！」
そう言い放つ某の瞳には、強い焔のような眼差しを宿していた。
そんな己を見つめて黙り込む大角。すると、普段の穏やかな笑みに戻り、閉じていた口を開く。
「それを聞いて安心致しました…」
「大角…？」
「おそらく、この先…我々には更なる危機が訪れるやも知れぬ。しかし、貴方のように、恋い慕う者…「守りたい」と思う者がいれば、人は何倍も強くなれる…という事です」
そう告げた後、彼は古那屋の方へと戻っていった。
　大角…まことに、かたじけない…！
某は、大角のおかげで狭への気持ちを自覚する事ができた。これまで、許嫁だった大塚村の浜路の事が、やはり忘れる事ができなかった。しかし、狭が敵に攫われ、その身が危ない事。そして、先ほどの会話によって、某の心は決まったのであった――――――――
「犬士達はおるか！！？」
その翌々日、古那屋にいる犬士(われわれ)達の元に、政木狐(まさきぎつね)が現れる。

「政木狐…。そんなに声やかましくせんでも、聞こえておるわ」
あまりの大声に、ため息交じりで呟く現八。
しかし、そんな彼の台詞を完全に無視していた狐は、某の存在に気が付くと、すぐさま近寄ってくる。
「んな事より、朗報や！！浜路姫の居所がわかったんや！！」
「本当か！？」
それを聞いた途端、その場にいる全員の表情が変わった。
「しかし、政木狐よ。そなた…犬江親兵衛とやらと共に、京へ向かっていたのでは…？」
狭の居所がわかったのは喜ばしいが、某はこの狐が何故この場にいるのが不思議でたまらなかった。
「ああ…。実はな…」

ドカカッドカカッ
その後、行徳を出た犬士達は、とある場所へ向けて馬を走らせる。
行徳を出立する前――――――――――政木狐が行徳にたどり着くまでの経緯を語ってくれた。
彼の話だと、京から安房国へ戻る途中、妙椿ら敵方の動向を探っていた単節殿と偶然会いまみえる。そこから親兵衛の案により、政木狐を行徳におる我々の所に向かわせ、親兵衛と単節殿に敵の元へ乗り込む事となったという内容である。
政木狐（かれ）の話だと、単節殿は手負いだったという…。鬼の血を引くならば、傷の治りも早いと思っていたが…
某達は、道節から「鬼の忍びは我々よりも強靭な肉体を持つ」と聞いてはいたが、何故か妙な胸騒ぎを感じていた。
しかし、その妙な胸騒ぎは、嫌な意味で的中してしまう。

「単節さん…」
眠るように息を引き取った単節殿を見下ろしながら、涙を流す狭子。
行く途中で通りかかった海岸で、妙椿の刺客に襲われている彼女達

を見つけた某達。荘助達にはすぐに彼らの加勢に向かってもらい、某はその場にいなかった狭を必死で探した。
「狭っ！！！！」
ついに見つけ出した時、狭は蟇田素藤と共にいた。
「信乃っ…！！！」
そう己の名を呼ぶ彼女は、素藤に抱きすくめられ、その腕から容易に逃れられない状況に陥っていたと思われる。
特に怪我をしていないようなのでそこは安心したが――――――己の頬に狭の頬を近づけ、見せつけるかのように抱きしめる敵の表情を見た途端、無意識の内に怒りを感じていた。
その後、狭子を奪い返すために、某は素藤との死闘を繰り広げる。完全な勝利はできなかったが、何とか狭を取り返す事に成功した。
この時は、再会できた喜びでそれ所ではなかったが――――――――今にして思うと、狭が身を挺して素藤を止めようとした際、彼女にとって素藤は単なる“敵”ではなくなっていたのやもしれない。
妙椿の刺客を退けた後、鬼の弱点たる蒼血鬼の血が塗られた武器で致命傷を負った単節殿は、双子の姉・曳手（ひくて）殿の腕の中で息を引き取る。“忍びは人にあらず”
“死ぬ時は独り”という掟のある彼女達に涙を流していた狭をとても愛おしく感じた某は、黙ったまま彼女を抱きしめる。
身近な者であろうがなかろうが…尊い命が失われる事は、誠に悲しい…。そして、多くの命が犠牲となる“戦”…。守るべき者のためとはいえ、早くこのような悲しい出来事がなくなるよう努めなくては…
某は声を押し殺して泣く狭を抱きしめながら、これから待ち受けているであろう大戦（おおいくさ）への心を強く固めるのであった。

「それでは、各々…明日より、各地へ展開してもらいたい！」
「御意！！」

狭を助け出した後、我ら犬士の一行は安房国・里美家の本陣がある滝田城を訪れた。
兼ねてより里美家の棟梁・里美義実公から家臣として認められた某達は、戦での防衛使を勤める事と相成った。その戦の相手は、滸我の足利成氏公や関東管領・扇谷定正を要とする連合軍。
道節からの報せによると、この戦を起こすために画策していたのが…妙椿と名乗る尼僧と、白髪の鬼・蟇田素藤だという。しかも妙椿とは、里美家に滅ぼされた領主・山下定兼の妻であった玉梓なる者が怨霊として現世に現れた存在だという。
　因果が巡る…とは、まさにこの事を申すのであろうな…
某は、己が防衛使を勤める事となった国府台へ向かいながら、そのような事を考えていた。

そして、戦いの火蓋が切られ、この地に赴いた某・現八・親兵衛らは戦いに身を投じていく。狭の奪還を通じて、8人目の犬士である事が発覚した犬江親兵衛仁。年は13か14程と年若いが…京で見せたという活躍や、最初に彼女の奪還を成功させた童なだけあり、同じ犬士としてとても頼もしかった。
「けが人を癒すため」として行軍に加わってくれた狭のためにも…必ず、この地を死守してみせる…！！
馬にまたがった某は村雨丸を駆使して、襲い掛かる敵を次々となぎ倒す。戦場は、村雨丸からほとばしる水柱が、この戦場を舞う。現八や犬兵衛も足軽隊として彼らの前を先導し、確実な一撃と素早い動きで敵を翻弄していく。
「あれは…！！？」
しかし、優勢かと思われていた最初の戦も、敵方の新兵器によって苦戦を強いられる事となる。
後に狭からその兵器の名を教えてもらう事となる。彼女の話だと、その新兵器は騈馬三連車といい、大陸にある国の戦車を真似て作った戦車だという。大八車みたいなものを3つ連ね、前と後ろにそれ

ぞれ鉄砲と弓矢を持った6人の兵がそこに乗り、御者は左右に2人と騎馬が6頭。馬にもそれぞれ、薄鉄の鎧が着けてあるという代物。戦のさ中、我ら里美軍は「それ」を目の当たりにするのである。

「犬塚殿！！わが兵は馬兵と足軽隊で組まれております！！このまでは、圧倒的に不利です…！！」

兵の一人が某に進言する。

「っ…！！」

周囲を見渡すと、駢馬三連車を前にもろくも崩れる自軍の光景が目に入ってくる。

確かにこのままの進軍は、絶対的に不利…。しかし、敵に背中を見せれば、追い討ちに遭って全滅する可能性も…

兵達にどのような命を下せばよいかと困惑する信乃。しかし、時は一刻と過ぎ、本当に撤退をせねばいけない状況に段々陥っていく。

「信乃！！！」

「現八…！？」

すると、全身が傷だらけの現八が某の元に現れる。

「わしが殿を勤める！！その間に…早く兵を退かせるんだ！！！」

「！！！」

その台詞を聞いた途端、目を丸くして驚く。

しかし、戦況が不利なため、某の心も揺らいでいた。

「早くしろ…！！このまま全滅させる気か！！！？」

鬼気迫った現八の表情を見た途端、考える暇などない事を悟る。

「まもなく夜が更ける！！…一時、撤退せよ！！！」

某の合図と共に、里美軍は撤退を開始する。

現八…死ぬなよ…！！！

殿を務めてくれた現八が無事に戻る事を願いながら、某や親兵衛の軍は撤退を始める。国府台での戦い初日は、里見軍に多大な被害を与えて終える事となった。

その後、文明（ふめ）の岡に陣を移す事となる里見軍。絶体絶命の危機に陥っていたが…狭の元に里見家一の姫であり、我ら八犬士の産みの親である伏姫の神霊が現れる。彼女が狭をこの時代に誘った張本人である事を悟り、実の姉姫にあたるという事実は、不思議な心地がした。

また、伏姫様は、劣勢のわれ等に「火猪（かちょ）の計」という策を授けてくれた事により、戦況が一変。里見軍による逆転劇が始まるのである。

そして、勝利への光明が見えてきた矢先――――――――狭子の元に魔の手が伸びていたのである。

第3話　守るための戦い（後書き）

いかがでしたか。
今回は恋愛模様もあれば、戦場面もありで、まとめるのが大変でした。
…そして、やはり3話分ではまとまりきれませんでした（ＴｏＴ）
信乃は本編でだと準主人公的な立ち位置にいるので、彼視線で描くと、いろいろ載せられる事が多い・・・。
とまぁ、こんなかんじですが、とりあえず随想録1の信乃編はもう少し続きます。

ご意見・ご感想があれば宜しくお願いいたします！

最終話　狭子の幸せを願って（前書き）

”最終話”とありますが、この章が最後なだけであり、随想録が終わりというわけでもないです。

最終話　狭子の幸せを願って

「はぁぁぁっ！！」
馬にまたがりながら、某は村雨丸を振るう。
神霊・伏姫様が授けてくださった神猪の活躍によって、形勢を一変させる里見軍。某も先陣を切って敵をなぎ倒していく――――――――――――――――優勢に変わってきた矢先、某の元に一人の足軽に装った里見の忍びが現れる。
「犬塚殿、一大事でございます」
「…如何した」
「実は…」

忍びによる報せを聞いた某は、急ぎ滝田城へと馬を飛ばす。
国府台を出立する少し前――――――――――――――――
「狭…否、浜路姫が！！？」
里見軍の陣に戻った某は、狭子と共に滝田城へ向かっていたという政木大全孝嗣（まさきだいぜんたかつぐ）からの報せを聞いて驚く。
「はい。義実（よしざね）公の訃報を聞き、某と城へ早馬を走らせておりましたが、不覚にも某は気絶させられてしまい…気が付けば、姫のお姿があられなかった次第でございます！！」
「貴様…そのお方は、殿より御身を預かりし姫！！護衛もできず、何という不始末！！」
「申し訳ございませんっ！！！」
某の側にいた里見家の家臣が、大全を責める。
しかし、彼の口調を聞いていれば、本当に責任を感じているのがよくわかる。
「…過ぎた事は、致し方ない。…だが…」
右手の拳を強く握りしめながら、某は重たくなった口を開く。
「姫の救助には、某が向かう！！大全、お主はそれを現八や親兵衛

に伝え…けが人への尽力を頼む！」
「御意！！」
落ち着いた口調で彼らを宥める一方、某の胸中は慌てていた。
大全は連合軍方の忍によって、狭が連れ去られたと申していたが…。だが、成氏公や管領殿は彼女の顔は知らぬはず…。故に、これは…！！
馬を走らせながら、某の頭の中には妙椿なる者の名が浮かんでいた。
…里見家を恨み、処刑された玉梓（たまずさ）が怨霊…。忍を差し向けたのがそやつならば、彼女の連れて行かれた場所は…！！
連れ去られた狭や敵の事を考えながら、某を乗せた馬は山道を駆け抜けていく。

「狭…。よく…よくぞ頑張ったな…！」
これは、滝田城に向かった某が狭を助け出した時に述べた台詞（ことば）。
あれから滝田城へ参った某は、狭から放たれた蒼き光と村雨丸の力によって、敵である玉梓の怨霊を滅する事ができた。しかし、荘助から受け取った狭の身体には無数の切傷があった。玉梓によって怪我を負わされた彼女は、多く血を失ったためか意識を失っていたようだ。
女子が鎧を身にまとう事さえまれなのに…狭はこの小さき身体で痛みに耐え、ましてや敵である玉梓をも説得しようとして…
この華奢で小さき身体に、如何なる程の強さを持っているのか――――――――――狭の身体を抱きかかえながら、某の胸中はそんな想いでいっぱいになる。
その後、薬師の元に送り届けた後、祈るような想いで眠る彼女を見つめ続けた。
やはり、狭が助からないのではないか…と思うと、誠に胸が痛くなるものだな…
義実公の家臣として戦の講和条約が結ばれる場におった時も、某は狭の事で頭がいっぱいであった。

先の戦いで足利成氏公や扇谷定正らと戦い勝利した里見軍は、領地や賠償金は求めずに条約を締結させる。それは、「安房国を争いのない平和な国にしたい」という義実公たっての願いであった。こうして、狭が後に申していた大戦・“関東大戦”が終わり、安房国には平和が訪れる事と相成る。しかし、某には未だ燻ぶっている想いと、未だ明かされていない狭子の前世なるものという問題が待ち構えていたのであった――――――――――

狭…。某は…！！

とある晩、某はいろんな事を考えていたため、なかなか寝付けなかった。というのも、今から少し前、狭子が蟇田素藤（ひきたもとふじ）によって攫われたからである。

怪我が治った後、狭は姉君にあたる静峯（しずお）姫が入手した特殊なお香によって、前世の記憶が蘇る。「内なる何かを思い出す」という逸話が誠であるとは誰も考えておらなんだゆえ、その場にいた里見の姫君達や、報せを聞いた八犬士（われわれ）も驚いた。そして、気を失って眠っていた彼女を、素藤が富山へと連れ去ってしまったのである。

ん…？

眠るに眠れなかった某は、突然何やら変わった気配を感じ始める。

「…誰かおるのか？」

周囲を見渡しながら、その言葉を口にする。

しかし、人という気配は全く感じられない。部屋の外から聴こえる風の音しか周囲にはなかった。

気のせいか…

そう思った某は、再び床に就こうとしたその時であった。

『信乃…』

「！！？」

聞き慣れぬ声が聞こえた途端、某は目を見開いて驚く。

そんな己の名を呼んでいたのは――――――――――――柿のような色

の髪をし、所々ちぎれた着物を身に着けた男子(おのご)がいた。しかし、その姿は神霊のごとく透けて見える。
「そなた…何者だ？」
疑惑の瞳(め)でこの者を見上げる。
『俺の事はいい…。それより、あいつ…狭子を…』
「狭を知っておるのか！！？」
考える間もなく、この霊らしき者が狭を知っている事によって、ますます頭が混乱してくる。
…だが、この顔…。もしや…？
「そなた…染谷純一…なる若者か…？」
恐る恐るその名を口にする。
あまり詳しくはないが、狭から聞いた事がある。彼女は幼き頃から本当の親の顔を知らず、孤児院なる場所で育ったと…。そして、その孤児院とやらから共に飯を食い、親しくしていた男子(おのご)がおった事を。そして、犬士探しの旅の道中にて、素藤が申していた“染谷純一”なる者であった事を知る事となる――――――――
「じゃが…何故、某の名を？」
『…』
そう問うた瞬間、染谷とやらの霊は複雑な表情(かお)をしながら遠くを見つめる。
『それよりも…だ。お前、狭の前世が、あの蒼血鬼の想い人だったって事は知っているか？』
「しって…？」
聞き慣れぬ言葉に、某は首をかしげる。
しかし、“あの蒼血鬼”が蟇田素藤(ひきたもとふじ)である事だけは理解できた。
『俺は、あの鬼…今は蟇田素藤(ひきたもとふじ)という俺の名を継いだ奴の事を知っている。…奴がどれだけ、琥狛って女子を想っていたのかも…』
「！！」
狭が申していた、前の世を生きていた女子の名…！
“琥狛”という名を聞いた途端、某の表情が強張る。

『あいつに世話んなった俺としては、幸せになってもらいたいと願っている。…だが…！』
「…だが…？」
某は、彼が申す事を静かに聞いている。
…妙椿の事もあり、素藤（やつ）を敵としてか見ていなかったが…このように、気に掛ける輩もいようとはな…
彼の話を聞きながら、某はそんな事を考えていた。
「最終的には、狭子にも幸せになってほしい…と願っている。しかし、あいつは今、“琥狛”としての己も思い出した…。きっと、今の自分の事もあって悩んでいる…！」
「純一…お主…」
彼の口調は、冷静そうに見えてとても必死そうな眼差しを持っていた。
おそらく、狭の事を好いていたのだろう――――――――だが、霊として現れたという事は、もうこの世の者ではないという証。恋い慕っていても、触れることすら叶わない身となっている事実がひしひしと感じられる。
『だから、犬塚信乃！あんたも狭の事が好きならば、あいつが何を望んでいるのか…どう在りたいのかを確かめてほしい！狭にとって、お前と蒼血鬼（あいつ）のどちらと共にあるのが幸せかを…！！』
「狭の…幸せ…」
『俺にはそれはできない…。あいつの事を見つけたかったのに、あいつより先に死んでしまったから…』
そう言って俯く純一を見た途端、胸が締め付けられるような気分となった。
その後、幾何かの時を沈黙が続く。
「…相わかった。染谷純一の霊よ…」
『！』
最初に口を開いた某は、己の両手を見つめながら話を続ける。
「某とて…もう、あの娘が悲しむ顔は見とうないからな…。それに、

何があっても守り、幸せにするとこの命に誓った…！」
狭の前世とやらについてであったり、素藤をどう見ているのかなど…揺れ動く想いがあったが…
いろんな想いが交差していたが、今目の前にいる霊との対話で、某の決心がついた。その表情を見た純一は、安堵したのか、少しだけ微笑みの色を見せる。
『…頼むぜ、八犬伝のヒーロー…！』
意味不明な台詞を告げた彼は、その場から姿を消した。
染谷純一の霊が何故現れたのか、いろいろと残る疑問はあったが…この時の某は、狭の事で頭がいっぱいであった。
待っていてほしい…狭…！！
強い想いを胸に抱きながら、某は夜を過ごす。そして、“始まりの地”とも言える霊山・富山へ向かう事となるのであった――――――――――――――――

「信乃…どうしたの？」
己の住まう場所となった東条城の本丸から安房国を眺めていた某は、後ろからやってきた狭に声をかけられる。
「いや…。これまでの事を少し…思い返していたのだ」
「そっか…」
すっかりこの時代の服装を着なれた狭が、某の隣に立つ。
「本当に…いろいろな事があったよね…」
「ああ…」
某の隣に立った彼女もまた、安房国の景色を眺めながら呟く。
富山では、思わぬ事実を聞かされて困惑したが…素藤（やつ）との戦いがあって、今の暮らしがあるようなものだからな…
あれだけ敵対していたのに、今にして思うと…ただの悪人ではなかったのかもしれないと某は無意識の内に考えていた。
「狭…」

「ん…？」
彼女の名を呼び、これまでに起きた出来事が走馬灯のように蘇る。
「父・番作の死から今まで…まことにいろいろな事があったが…今、これだけははっきりと言える」
「信乃…？」
某が真剣な表情をしているのに気が付いた狭は、何を言われるのか待っているような表情をし始める。
己の心臓が強く脈打ってはいるが…心からそう思える言葉を口にしようとする。
「この先、如何なる事が起きようとも…某が、そなたと共に生きていきたい」
「信乃…！」
「…愛している」
狭が口を開くのを遮るようにして、彼女の華奢な肉体を抱きしめる。
某は、彼女が教えてくれた“先の世”で使われている想いを告げる言葉を口にした。抱きしめる腕を少し緩めた時…頬を真っ赤に染めながら、照れているような表情を狭が見せる。そんな彼女を見た某は、心から愛しく想い――――――――彼女に接吻をした。それは、後で気恥ずかしくなるくらいに強く、厚いものであった。

その後の詳細は、文面で書くのも気恥ずかしいくらいな出来事であったため、あえて記さないでおこう。こうして、狭との出会いから今日までの事を書き綴った書物を、棚の奥底にしまいこむ。それは、彼女に「これ」の所在を知られないようにするためであった。
里見の犬士として戦の世を生き、生涯の伴侶ともいえる女子と出逢えた事――――――――それが、この書物に記した某の随想録であった――――――――――――――――

最終話　狭子の幸せを願って（後書き）

如何でしたか。
ここで出てきた染谷純一とは、「蒼き牡丹」の主人公・三木狭子の幼馴染で、作者によるオリジナルキャラ。彼についての詳細は、「蒼き牡丹」をご覧ください★

さて、とりあえず犬塚信乃編はここでおしまいです。
第2章も犬士の話といきたいですが…信乃ほど話が続く人物は少ないので、どうしようか試行錯誤中です。
「犬鬼人」というタイトルにある「鬼」と「人」の話は浮かんでいるのですが、登場人物順で書きたいので、もう少し後に…
とりあえず、考え付いた構成を今はまとめている最中だったりします！
外伝ですが、ご意見・ご感想があればよろしくお願い致します（＾＾

プロローグ2（前書き）

第2章は犬飼現八の物語です。

プロローグ2

何を好き好んで、このような風体をしておるのだろう？
その娘に初めて会うた時、某がまず考えたのがそれだ。全体が紺色に近い色合いで、裾や至る所に白い刺繍が盛り込まれた着物を身に着けてはいたが、その娘は女子。女子なのに何故、我ら武士が着るような着物を身にまとっていたのかが不思議であった。

その者の名は三木狭子。行徳の古那屋という宿で出逢った際、「先の世から来た」と申していたが、かなり胡散臭い気がしてならない。おかしな言葉づかいをし、女子らしからぬ行動をする娘――――――――――――女子嫌いの某にとって、始めは共に歩く事すら嫌に思っていた。
しかし、己が伏姫なる里見家の者に生み出された八犬士の一人と知らされた時、某の周囲は何もかもが大きく変化を見せる事になる。
某の頬にあるものと同じ牡丹の痣頬を持ち、犬の姓を名乗る者達。とりわけ武蔵国・大塚村が出の犬士・犬塚信乃戌孝（いぬづかしのもりたか）なる者とは、後に長きに渡る“好敵”と相成る事となる。

犬士を探す旅のさ中、某の中に眠っていた素質の目覚めと共に始まる、人外なる者との戦い。淡き恋心、葛藤、戦――――――――――――多くの事象を経て、女嫌いだった某も妻をめとる事と相成る。
これは、天涯孤独の某を変えた、犬士と“先の世から来た姫”と共に旅した頃の出来事を記録した犬飼現八信道（いぬかいげんぱちのぶみち）たる某の物語であった――――――――――――

第1話　鬼の資質を持つ人間

「城下にて、賊を一撃で沈めた奴がおるそうだ」
「へぇ…。俺は、女子のような童が倒したと耳にしたぞ！」
滸我の御所より深き地の底にて、獄舎の見張り番がそのような事を口にしていた。
　女子のような童が、大の大男を一撃で…か。成程、浮世ではそのような事が…
当時、お上に異を唱えた罪で獄舎に繋がれていた某は、牢の中で見張り番の会話に耳を傾けていた。
　強き者の話を聞けば、一度会うてみたい…と思うのは、武芸者の性か…
同時にそんな事を考えていた。
その会話から幾何かの時を経て思わぬお召しを受けた某は、牢を出る事が叶う。また、会話に出てきた“女子のような童”の正体が、三木狭子という“先の世から来た姫”だったという事実を、この後に待ち受けている旅の道中で知ることと相成るのであった――――

「…誰かを助けるのに、理由なんているの？」
獄舎を出た後、芳流閣の屋根の上で犬塚信乃という公方を狙った賊と死闘を繰り広げる。
しかし、最後の方で利根川に転落してしまい、流れ着いた国境の地・行徳にて出会った女子がこの台詞を口にする。それは、女が“欲深く卑しい存在”としか見ていなかった某にとっては、目を丸くするほど驚いた台詞であった。
行徳で宿を営む男・犬田小文吾に匿われた某と信乃。しかし、その後まもなく、彼奴は破傷風にて死線をさまよう。

「…某がやる」
この時、「その役目は某にしかできない」と考え、名乗り出る。
破傷風に冒された信乃を救うには、若き男女の生き血が必要だという。しかし、女子の血の方には一つの決まりがあり、その場の流れもあったが、男子の着物を身にまとった女子・三木狭子が己の血を捧げると申し出たのだ。しかし、血を絞るにしても、刀の使い方を誤れば、失血死する。故に、その女子を死なせぬように血を搾り取る役目を某がやる事となったのだ。
「痛むと思うが…許せ」
娘の着物の袂(たもと)をまくり、某は右手に小太刀を握りしめる。
そやつの右腕には、刀傷としては不自然な形をした傷が存在していた。嫁入り前の娘の身体を傷つけるのに多少のためらいがあった某は、あえてその傷があった場所に刀の斬りこみを入れる。
「痛っ…！」
鈍い音と共に、某の小太刀が娘の細い腕を傷つける。
加減してはいるが、それでも感じる痛みは強い。本来なら悲鳴をあげても可笑しくないというに――――――――その娘は歯を食いしばって、必死に痛みに耐えていた。
この時、何故か某の心の臓がドクンと鳴ったのをよく覚えている。

「法師様！お気をつけて…！」
去っていく法師に、先の世から来た娘が見送る。
狭や小文吾の協力もあり、病が治り起き上れるようになった信乃。
その後、狭と共におった、大法師(ちゅだいほうし)というご出家が、我らに里見の八犬士だという事。そして、伏姫との縁について語りを聞いた。また、同時に狭が“先の世から来た女子”である事も知る事となる。
信乃の話によると、彼の故郷に犬川荘助義任(いぬかわそうすけよしとう)という犬士がおるらしく、そやつを迎えるために我らは旅へ出る事となる。一方、ご出家は主である里見義実(さとみよしざね)公に報せるべく、一足先に行徳を後にした。
…？何故か、おかしな気配を感じる…。これは…殺気…？

古那屋の廊下に立っていた某はこの時、宿の周辺に今までに感じた事のない気配を感じ取る。その気は黒く禍々しい…。まるで、妖のような気配だった。
不思議に思った某は、警戒をしながら周囲を見渡す。
「現八…どうしたの？」
「！！」
すると、不意に狭子の声が聞こえてくる。
その瞬間、感じていた禍々しい気が一瞬にして消え失せる。
「…お主か」
狭の存在に気がついた某は、我に変えったような表情で口を開く。
「何やら、誰かに見張られているような気がしたのだが…。どうやら、気のせいのようじゃな」
困惑の色は消えなかったが、某は狭や信乃達にはそのように口にした。
一体、あれは…何だったのだろうか？
その後、信乃・小文吾・狭と某の４人は古那屋を出て、信乃の故郷である武蔵国・大塚村へ向かう事となる。道中、某はあの禍々しい気の事が頭から離れなかった。
しかし、それもある者達の襲撃によって、“禍々しい気”の正体を知る事と相成るのであった――――――――

「狭！！！」
その場に現れた際、某は驚く。
恐怖に飲まれそうな表情をした彼女の前に、この世の者とは思えないような“気”を発する白髪の男がいた。狭の右腕を掴んでいたその男の口元には、僅かだが血がついている。このありえないくらいの殺気に怖気づくも、絡まれている娘の元へ行こうとした時…その男が某の前に立ち塞がる。
「てめぇの相手は、俺様がしてやるぜ！！」

目に負えるか否かぐらいの一閃を何とか弾いた某は、間合いをとった際にこの台詞を耳にする。
紺色の長髪を頭てっぺん近く辺りで結い、少し肌蹴ているが忍のような格好をした男が視線の先にいた。その後、某はこの男との死闘を繰り広げる事となる。
「このかんじ…まさか、古那屋で感じた気配は、貴様か！！？」
「お？もしや、俺様が潜んでいた事に気が付いていたのか？」
「ふん！そのような禍々しい気を感じた途端、すぐに気が付いたわ！！」
「！！」
某の台詞を聞いたこの男は、すぐさま間合いを取る。
「へぇ…まさか、人間の分際で俺様の気配に気が付くとは…お前、見どころがあるのかもな？」
「…何の事だ」
意味深な台詞を口にする男は、不気味な笑みを浮かべていた。
狭…！！？
この時、我らから少し離れた場所にいた狭と白髪の男の姿が目に入る。よく見ると、右腕だけが吊り上げられた状態で、まるで気絶しているように見えた。
「少しおとなしくしてもらった…。さて…一緒に来てもらおうか…！」
白髪の男がそう口にした途端、某はこのままだと狭が連れ去られる事を本能で悟る。
「くっ…！！」
彼女の方へ向かおうとしたが、この忍の格好をした男が行く手を阻み、救出に向かえない。絶対絶命だったその時…信乃や小文吾の登場によって、事態は変わった。
「ちっ…お楽しみもここまで…か」
「何！！？」
信乃が白髪の男に立ち向かったのを見た群青色の髪の男は、ため息

をつきながら忍び刀を納める。
「！？」
すると、一瞬にして男の姿が消える。
どこへ行ったのかと、某は周囲を見渡す。
「お前…同族になる資質があるな」
「！！？」
耳元に、気色悪い声を囁かれ、某は驚く。
気配すら感じなかったその男は、いつの間にか己の背後にいたのである。
「っ！！！」
悪寒がした某は、その直後、背後に向きなおして刀を振るう…が、男の姿はまるで霧のように薄くなり、消えてしまう。
「どこいきやがった…！！？でてこい！！」
周囲を見渡すが、奴の気配がほとんど感じられない。
『くく…。何、またてめぇとは相まみえる事となりそうだぜ？』
「何！！？」
すると、どこからか奴の声が響いてくる。
『あのうまそうな小娘の事もあるしな…。まぁ、その時にでも、遊んでやるよ』
「！？」
意味深な台詞に突然、嫌な予感を感じる。
しかし、某の驚きはその先にあった。
『あばよ！“鬼”の資質を持つ人間！！』
「なっ…！！？」
思わぬ台詞に、身体が硬直してしまう。
“鬼”…だと…！！？
その後、奴が口にした言葉について考えたが…いくら考えても、見解が見つからない。
…そうだ、狭と犬士達(あいつら)…！！！
我に返った某は、地面に座り込んで茫然としている狭子の元へと走

り寄るのであった。

この襲撃の後、我らは犬川荘助を仲間にし、次なる犬士・犬山道節忠与を迎えるために上州・白井へ向かう。道中で一騒動に巻き込まれた後、くの一の風貌をした娘・単節の導きを経て、上野国・荒芽山に住まう老女・音音の草庵を訪れる事と相成った。そして、この老女の口から“鬼”という人外の者達の存在を知る事となる。

「素藤を始めとし、先ほど姫の血を食らおうとした忍・狩辞下や、漆黒の着物をまとう鬼・牙静…。彼らの狙いが、姫である事も…方々、ご存じですね？」

「！？」

音音が申したこの台詞に、某の眉間にしわが一つ増える。

狭の血を食らおうとした…って、まさか…！！

この時、某の心の蔵は強く脈打っていた。

『あのうまそうな小娘の事もあるしな…。まぁ、その時にでも、遊んでやるよ』

蟇田権頭素藤という蒼血鬼（＝肉体が冷たく、血を食らう鬼のこと）らの襲撃を受けた際、某の前に立ち塞がった男…狩辞下が申していた台詞を思い出す。

それを思い出した某は、無意識の内に話を聞きいる狭の顔を見つめていた。

彼女の首筋と耳たぶには、僅かではあるが血痕が残っていた。

そういう…事か…！！！

某は、皆と共に話を聞くさ中…激しい憤りを感じ、膝につけていた右手の拳を強く握りしめていたのである。

話がまとまった後――――――――――我ら一行は、この草庵で夜を明かす事となる。音音から信じられないような話を多く聞いた某は、気になって寝付く事ができなかった。その老女によって、狭自身が知らなかった事も知り得たが…今の某は、それよりも“鬼”という

存在が気になっていた。
「…隠れてないで、さっさと姿を現したらどうじゃ」
考え事をしていた某は、その後すぐさま気が付いた気配の方を睨みつける。
「…やっぱり、気が付いていやがったか」
ほんの短い間があった後、木陰に隠れていた狩辞下が姿を現す。
草庵の入口付近にいた某は、少し離れた場所にいる奴を睨みつけながら、重たくなった口を開く。
「…何用じゃ」
「当然、お前らの見張り…偵察さ。素藤の命でここまで来たが…もう一つ、別の用もあってな」
「…これ以上、狭には指一本触れさせないぞ…！！」
この台詞によって、某が殺気立っている事に気が付いた奴は、不気味な笑みを浮かべながら、飄々とした態度で口を開く。
「ああ、あの小娘の事か！…予想通り、うまい血の持ち主だったぜ？」
「何っ！！？」
狩辞下は、某を試すかのような口調で挑発してくる。
しかし、この台詞によって…扇谷定正（おうぎがやつさだまさ）の家臣と殺りあっていた際、狭子がこの男に襲われていた事を悟る。
「まぁ、あの小娘は素藤のお気に入りらしいから、これ以上の手出しはしねぇが…」
ニヤニヤしている奴の表情は、徐々に狂気に満ちた笑みへと変貌していく。
「あの娘から頂戴した血の味…そして、その時に見せた恐怖に包まれた表情（かお）…。あれは、本当に快感だったぜ…！」
「！！」
そう口にする奴を見た途端、全身に鳥肌が立つ。
某の目の前にいた男の瞳は――――――――――――――――――――まさに、“血に飢えた鬼”そのものだったからである。

冷や汗をかき、茫然としている某の目の前に、思いもよらぬ人物が姿を現す。
「…現八殿。お気を確かに」
「お主…！」
隙だらけの某の目の前に現れたのは…栗色の髪を持ち、単節(ひとよ)の双子の姉である鬼の忍・曳手(ひくて)であった。
「姿をさらしてしまい、申し訳ない。…しかし、事態を見てこれは放置できぬと判断故の行動…どうか、お許しください」
冷静な口調で申すその忍びは、敵の目の前に立ちはだかるようにして立っていた。
「…どうやら、邪魔が入ったようだな」
少し離れた場所にいる狩辞下が、そう口にしながら舌打ちをする。
「ここは、我が主が住まい、今は客人も参られている場所…。早々に立ち去れ、外道が…！」
物凄い殺気をまとったくの一の声が、辺りに響く。
女子とはいえ、流石は鬼の忍び…。人の子よりは強き言霊があるのだろうな…
この時、某はそんな事を考えていた。
「…今回は刃を交えるつもりはねぇから、安心しな！とりあえず、今宵はおとなしく退散してやるが…」
その場を去ろうとした蒼血鬼は、何かを思い出したのか、その場に立ち止まる。
「前に申した“鬼の資質”…ってのは、並の人間よりも力に優れている事。そして、鬼(おれたち)の気配を感じ取れる能力を持つ事を指す」
「！！」
この時、某の表情は一変し、冷静な表情をした曳手(ひくて)も眉を一瞬だけ動かす。
そんな我らの動揺を目の当たりにした狩辞下は、満足そうな笑みを浮かべながら、さらに話続ける。
「俺達側につくなら、歓迎するぜ？…犬飼現八信道(いぬかいげんばちのぶみち)！」

不気味な笑みを浮かべた奴は、その台詞を残して、あっという間に姿を消してしまう。
敵が去った後…しばしの間だけ、我らの間に沈黙が続く。
「…明日(みょうにち)、貴方様も含め、朝早い出発となるでしょう。…今は兎に角、お体を休めてください。見張りの方は、我ら双子が致します故…」
「あ…ああ…」
冷静な口調で促され、某はその場を後にする。
“鬼の資質”…。一体、奴はどういうつもりで某にあんなことを申したのだ…！？
奴と対峙した事で、狭が襲われていた事を認識する事が叶ったが…去り際に残した言葉の真意が掴めぬまま、某達は新たな旅立ちを果たす事となるのであった――――――――――――――

第1話　鬼の資質を持つ人間（後書き）

いかがでしたか。
さて、今回の現八編は彼の視点から見た物語ですが…。今回は本編では語れなかった彼の持つ”資質”に焦点を当てようかなと思います。
現八は犬士の中でも信乃の次にお気に入りの登場人物だったりするので、番外編を書きたいな～と思いつつ、構成がなかなかまとまらないかんじでした。
今回も、どこで話の区切りをつけるかの判断がしづらく、こんなかんじに…（汗）

基本、本編である「蒼き牡丹」の時系列に沿って話が進みますが…一方で、最初の犬塚信乃編で出てきた場面も少しあるため、随想録1を読んでから読むと、よりわかるかと思われます。

さて、今回の番外編は狩辞下（りょうじげ）や曳手（ひくて）のように、本編ではあまり活躍のなかった登場人物が少しずつ出るのが見どころかと思います。
番外編ではありますが、ご意見・ご感想がありましたら、宜しくお願い致します（＾＾

第2話　淡い恋心

荒芽山で一夜を過ごした我ら一行は、3つに分かれて旅をする事と相成る。神護鬼（＝神霊などが見える能力を持った鬼）・音音（おとね）の案により、下野国（しもつけのくに）に信乃・狭子・某の3人が。武蔵国（むさしのくに）に小文吾と荘助。そして、道節は単身で滸我へと旅立つ事となった。某はというと――――――――――――音音の草庵にて、蒼血鬼の忍・狩辞下が述べていた台詞（ことば）が頭から離れなかった。

『俺達側につくなら、歓迎するぜ？…犬飼現八信道（いぬかいげんぱちのぶみち）！』

…奴が申していたあの台詞は、まるで人が鬼にもなり得るような口ぶりじゃったような…

そんな事を考えていた某達3人は、上野国と下野国の国境にある村・猿石村に到着していた。己が持つという“鬼の資質”について考える一方…某の胸中には、これまではなかった新たな想いが芽生える事となる。

一宿借りるために訪れたその村にて、今まで目にしたことのない出来事に遭遇する。風呂に入っていた狭子が戻ってきた際、瞳はうつろで、いつもの状態とかなり違っていた。まるで、何かに憑かれている雰囲気を持った彼女は、信乃の事を「様」をつけて呼ぶなど、不可解な言動も目立っていた時だった。

『なんで、私の元へ来たのかわからないけど…これって…！』

「…！？」

口を閉じている狭の身体から、“彼女自身”の声が聞こえてくる。

狭…！！？

近くにいた信乃の顔を見たが、奴は今の声は聴こえていないようであった。その後、狭の肉体にいた“それ”の正体が、信乃の亡き許嫁・浜路という女子であるという事実を、本人の口から聴かされた某と信乃。

「…！！」
その後、浜路と信乃の行動を見た瞬間――――――――――某は言葉を失った。また、驚きの余り、大事な事を見落とす所であった。
『…今、信乃は私を抱きしめてくれている…。でも、それは私の中にいる浜路（このこ）を抱きしめているのであって、私ではない――――――――』
「…！！！」
またもや狭の声が頭の中に響き…某は悟った。
この“浜路”という女子に取り憑かれつつも、肉体の持ち主である“狭本人”は自我を保っているという事を。
もし、わしに聴こえるこの声が、狭自身のものならば…信乃（やつ）は…あの娘に、何たる仕打ちをしておるのじゃ…！！！
その場の成り行きを見守りつつも、彼女の“心の叫び”を耳にした某は、胸が息づまるように苦しくなり…同時に、信乃に対して、激しい憤りを覚えるのであった。
その後、某は怒りの余りに信乃の頬を殴る事となる。それは、生涯で唯一、仲間に手を挙げた瞬間であった――――――――――

何処だ…何処におる…！！？
そして、下野国（しもつけのくに）に入った某達は、化け猫が人々に害をなしているという噂を耳にし、そやつが現れるという庚申山へと入った。
すると案の定、噂の化け猫が現れるが…途中、己が持つ“鬼の資質”が逆に災いとなる。一度姿を現したものの、一瞬の内に木の陰に逃げこんでしまった化け猫。信乃と狭が周囲を警戒している中、某は思いがけない気配を感じ取っていた。
このかんじは…鬼？だが、蒼血鬼である狩辞下や、神護鬼たる音（おと）音（ね）のような気配ではない…全く別の存在…！！？
姿は見えずとも、鬼のような気を強く感じていた某は、逆に今、対峙している化け猫の気配が全く読めずにいたのである。

「ぐっ！！！」
その後、信乃目がけて突進してきた化け猫によって、某は少し離れた場所に飛ばされる。
「痛てて…」
木の太い根っこに腕が激突した某は、ゆっくりと起き上って、何が起きたのかを把握しようとする。
「狭！？」
気が付くと、化け猫に押し倒されていたのは――――――――信乃ではなく、狭子であった。彼女の喉笛をかみ切ろうと襲い掛かる化け猫。敵を引きはがそうと必死に抵抗するが、化け猫の牙は少しずつ狭の首筋に近づいていく。
「この…！」
このままだと狭がやられると思った某は、咄嗟に麓の村で手に入れた矢で弓を弾く。
…当たれっ！！！
狙いを定めた某の矢は、一直線に化け猫へと向かっていく。
「ぎゃぁぉぉぉっ！！！」
その矢は見事、化け猫の左目に直撃。
痛みに苦しんだ化け猫は、一目散に逃げ去って行った。
そして、その後に6人目の犬士であり、某と旧知の仲である犬村大角礼儀(かくまさのり)…この時は角太郎と名乗っていた者の父・赤岩一角の亡霊と出逢い、話を聞く事と相成る。また、その際には戦いのさ中で感じた鬼の気配は消えていた。しかし、今回はその能力のせいで、仲間を危険な目に遭わせてしまった事に、ひどく後悔したのをよく覚えている。また、狭子のことを仲間としてだけではなく…一人の女子として見るようになった己も存在していたのである。
大角を仲間にした後、穂北で荘助や小文吾らと再会した某達は、道中ではぐれたという7人目の犬士・犬坂毛野胤智(いぬさかけのたねとも)を迎えるため、鈴茂林を訪れる事と相成った。しかし、そこで待ち受けていたのは―

――――――――――――足利成氏公や扇谷定正を影であやつる尼僧・妙椿（みょうちん）が放った刺客と、蒼血鬼・蟇田権頭素藤（ひきたごんのかみもとふじ）に仕える鬼・牙静（がぜい）の襲撃であった。某を含む犬士らは妙椿の刺客と戦い、信乃が狭を捕らえようとした牙静と刃を交えていたのである。

ザンッ！！

敵の数は多く、鉄鋼鉤を武器としていたため、多少の苦戦はしたが――――――――何とか退治する事ができた。幼き頃より武芸を習っていた大角の剣術、力任せではあるが、素手と敵を圧巻させる雄叫びを放つ小文吾…犬士という存在が、これほどまでに頼もしいと思ったのは、これが初めてであった。しかし、戦いに集中していた某達犬士は、その隙に狭が敵の手に堕ちた事に全く気が付かなかったのである。

「…余計な手出しは無用ですよ、皆さん。貴方がたがわたしに手を出せば、この娘の安全は保障できません」

「くっ…！」

狭子を捕らえた漆黒の着物を身にまとう鬼は、勝ち誇ったような雰囲気で淡々と語る。

この牙静という男…素藤ほどではなくても、やはり禍々しい“気”を感じる。狩辞下（やつ）と同じ、蒼血鬼である事に相違ないようだな…このように冷静に観察しているように見えたが、某の胸中は動揺でいっぱいであった。

「ああっ！！」

牙静によって腹を締め付けられ、痛みの余り絶叫する狭。

某より先に信乃の声が聴こえたので、口をつぐんだが…本来なら、奴の汚れた手で彼女に触れられた事が許せず、某も叫びそうなくらい敵に対して憤りを感じていたのである。その後、我らの方が数も多くて優勢のはずなのに、あっさりと狭が連れ去られてしまうのであった――――――――

「何故…その牙静とやらは、あの娘を連れ去ったのであろうか？」

「さぁ…。ただ、聞いた話から察するに、牙静の主たる蒼血鬼・蟇田素藤が狭子殿に何らかの執着を持っていたのは事実…」
「…何にせよ、あの鬼は逸東太と共にいた。それすなわち、憎き敵・扇谷定正に組みする者と見た」
その後、曳手（ひくて）と合流した七犬士は、その者の導きで行徳へと向かっていた。この会話はその道中、毛野と大角が話していた内容である。最初は不審がっていた毛野だったが、大角や荘助が伏姫との縁などを語り、何とか信じるようになった矢先の事だ。
…妙椿は何故、狭を攫わせたのか…。だが、牙静が申していた「彼女の正体」というのも気になる…。もしや、某の予感が的中してしまうのであろうか…？
この時、某は歩きながら猿石村での出来事を思い返していた。
あの時、信乃の亡き許嫁が申していた言葉の真意が正しければ…狭は…！？
いろんな予測が頭の中を飛び交い、混乱を極めた際、某はその場に立ち止まる。
「現八殿…如何した？」
荘助に声をかけられ、某は我に返る。
「いや…何もない」
そう呟いた某は、再び歩き出す。
生まれてこの方、一人の女子に対してこんなに想いを巡らせた事はなかった…。何なのであろうか…？何故、こんなにも心の臓がざわめくのか…
某は、己の中に生まれている気持ちに疑問を抱きながら、行徳へと急ぐのであった。今思えば――――――――愛しいと思う女子が窮地に立たされて初めて、己の気持ちを自覚するという、何とも皮肉な状況だったのだと冷静に考えることができるのであった。
「それこそまさしく、“女子をお慕いする気持ち”でしょうな」

「！」
この会話は、安房国・滝田城から一人出立する大角を見送りに行った際に、彼が申した台詞。
一つの命という犠牲を経て、狭子を奪還する事に成功した某達。最後の犬士・犬江親兵衛仁と共に安房国に向かった我らを待ち受けていたのは、足利成氏公や関東管領らが率いる連合軍との大戦。軍師となった毛野の謀により、大角や音音らが敵陣へ侵入する事と相成ったのだ。
「“女子を慕う気持ち”…？」
某は、大角が申した言葉に首をかしげていた。
そんな己を見た彼は、クスッと笑う。
「武芸百般免許皆伝、捕り物と拳法の名人と名高い現八殿も、やっとそのような時期を迎えられたか…」
「どういう意味じゃ？」
他人をからかっているような口調に対し、某は少し不機嫌になる。
自分に生まれた狭子への説明しづらい想いを大角に相談してみただけなのに、何故このような返答が来たのかが、某には全く解せなかった。
「…失言でしたね。許されよ」
「…じゃが、大角。お主が申した“気持ち”とやらは、何を意味するのだ？」
「そうですね…」
すると、大角は一呼吸おいてから口を開く。
「わたしが妻・雛衣に対する想いと似ているのでしょうか…。ですが、貴方が抱くその想いが初めてならば…それはより純粋無垢であり、人の子なら誰もが生まれる想い…」
「想い…」
某は遠くを見つめながら、呟く。
すると、大角は某の肩をポンと叩いた後、再び口を開く。
「何はともあれ、これから大戦が始まります。あなたに生まれたそ

の想いは、狭子殿を守りたいと思えば思うほど…戦の場において、大きな力となるでしょう。そして…もし、彼女の精神(こころ)が不安や恐怖に呑まれそうな際は、支えとなってさしあげるべきでしょう…」
「…」
「…因みに、貴方が感じている気持ちを端的に申すならば…“狭子殿に惚れている”という事です」
「！！」
「では、わたしはこれにて。…現八殿、ご武運をお祈りします」
「ああ…そなたもな」
某に“惚れる”という言葉について教えてくれた後、大角は去っていった。
「しかし…“叶わぬ想い”というのも、寂しいものですな…」
去っていく途中、大角は何やら独り言を述べていたらしいが――――――――――――声が小さくて、某には聞き取ることができなかったのである。
　某が、狭を好いておる…という事を意味するのだな…
己の掌を見つめながら、某はそんな事を思っていた。
「…今はとにかく、戦に専念しなくては…！！」
新たな主となった里見義実公のためにも、命を賭して戦う――――――――――――武士としての誓いを立てた某は、同時に「戦が終わったら、己の想いを伝えよう」という決意も固めていた。

その後始まった国府台での戦。初戦は苦戦を強いられ、某が殿(しんがり)を務める事で何とか全滅をまぬがれた里見軍。その際の気持ちの高ぶりや、不安と恐怖に駆られて、今にも泣きそうだった狭を目にした際――――――――――――某は無意識の内に彼女を抱きしめ、己の想いを口にする。
「お主が役立たず等という事は…断じてない」
「現八…？」
そう狭に告げる某の声は、微かに震えていた。

「よく聞け、狭。初めてお主に相まみえた時は、奇妙な小娘だと思うたが…。お主の気丈で明るい性格に励まされたのはわしらの方じゃ。…お主とて、何もわからぬこの時代に飛ばされて、不安な事も多かったであろうに」
そう…これは、今、わしが思っている気持ちそのもの…。この言葉に嘘偽りは一切ない…！
女子用の鎧を身にまとっているとはいえ…細くて華奢な狭子の肉体は、某の胸にちょうどいい具合におさまってしまう。故に、この小さき身体が、本当に壊れてしまうような…そのような不安を感じた某は、彼女を強く抱きしめていた。
その後、某は狭に己の想いを伝えたが…神霊・伏姫の登場もあり、返事は聞けずに終わってしまう。
しかし、その数日後――――――――――――――全てが終わり、傷だらけの狭を抱きかかえている信乃を目の当たりにした瞬間…彼女の気持ちが某に向いていない事を悟るのであった。

第2話　淡い恋心（後書き）

いかがでしたか。
今回は、普段は無愛想な現八の人間的な面が存分に描けた回だったと思います。
また、蒼き牡丹ではあまり活躍を見せられなかった大角を出せたのがよかったなと書き終えてから実感★
あと、序盤で「狭子の声が聞こえた」件について補足。
現八が聞いたその声は、蒼き牡丹では大塚村の浜路にとり憑かれていた狭子が心の中で思っていた事。信乃への想いを自覚する場面なのですが、この彼女の考えていた事が現八にはまる聞こえだったという次第です。
そんな”心の声”を聞き取る事ができたのも、ひとえに現八が持つ”資質”の一つだと思われます。因みに、原作（＝南総里見八犬伝）の彼にはこんな能力も、こんなシーンもございません（笑）

さて、予定では3話構成（プロローグ除く）の現八編ですが、果たしてまとまるのでしょうか？
でも、次に書く番外編も控えているので、頑張ってまとめていきたいと思います！
ご意見・ご感想などがありましたら、よろしくお願いします（＾＾

最終話　”人”としての信念（前書き）

現八編はここまでです

最終話　”人”としての信念

国府台・行徳・洲崎の３か所で展開された戦は、里見軍の大勝利に終わる。里見家を恨む全ての元凶・玉梓なる者も滅し、安房国に平和が戻った。そう、犬士としての役目も全てが終わったかに見えたが――――――――――――――――某の心は晴れなかった。
講和条約が締結し、結城合戦の死者を弔う大法要が行われた後、某は狭からあの時の返事を聞かされる事となる。
「私も、現八の事が好き。…でも、それは男として…とかではない。…“仲間”として…なの」
狭子は複雑そうな表情で話す。
おそらく、彼女なりにこの件について深く考えていたのであろう。
だが、やはり予想通りの答えか…。そして、狭が殿方として慕っているのは…
そう思った時、胸につかえていた何かが消え失せたような感覚がした。
「信乃の事が…好きなのであろう？」
「…！！」
数分ほどの沈黙が続いた後、某はその言葉を口にする。
己の初恋が早くも終いとなったのを悟った某は、その場を立ち去ろうと里見の姫に背を向ける。
「…お主は、我らが仕える里見家の姫。そして、頼もしき“仲間”じゃ。これからも、同志としてよしなにな…」
「現八…」
狭がせつなそうな表情で見守る中、某はその場を後にする。
　口で申した通り…これからも、某は狭子の事を友…そして、仲間として同じ時を過ごしていこうぞ…
叶わぬ想いだったとはいえ、某は何故か清々しい気分であった。こうして、某の初恋は終わりを告げたのである。

戦も終わり、里見家の家臣として迎えられた八犬士はそれぞれの役職につき、平和に暮らすはずだった。しかし、狭子や信乃にとってはまだ一つ大きな難問が残っていたのである。狭の過去世(かこせい)――――――――――――琥珀(こはく)なる者の事や、それに深く関わっていた蟇田素藤(ひきたもとふじ)との決着などであった。

一方、某の中にも燻ぶっている問題は一つ…。それは彼女の問題と共に降りかかる事と相成る。

くそ…。某らは一時も油断せずに座っておったが…こうもあっさり攫われるとは…！

ある日、とある事がきっかけで床に臥した狭子。しかしその晩、眠ったままの状態で蒼血鬼である蟇田素藤に連れ去られてしまう。この時、倒れた狭子を心配して、信乃を除く七犬士が滝田城に集結していた。この時、某は“流石は鬼だ”という想いもあった。

「鬼…」

その言葉を口にした途端、以前に聴いた“鬼の資質”なるものを思い出す。

「人が鬼に…そのような事が、ありえるのじゃろうか…」

「現八…？」

某は独り呟いていると、横にいた親兵衛が心配そうに己を顔を覗き込む。

まさかな…

某は独り、思いつめた表情のまま皆と共にその場を後にする。

そして、その晩――――――――――――――――某は何とも強烈な夢を見た。

夢の中の某は、姿見の前に立っていた。

「痣が…」

姿見に映る某の頬には、犬士の証たる牡丹花の形をした痣が消えてなくなっていた。

それは、里見の八犬士としての役目を終えた証だと某は感じていた。
しかし――――――
「！！？」
気が付くと、黒かった某の瞳に紅い光が宿る。そして、メキメキという音と共に、頭上に異様な物が姿を現す。
「これは…角！！？」
「よう、ついに同胞になれたじゃねぇか…！」
「！？」
聞き覚えのある声を聴いた瞬間、すぐにふり返ると…そこには狩辞下の姿が。
しかも、某の足元には、無数の死体が山積みにされている。そして、そこには狭子や信乃の姿もあった――――――――
「まさか、某が…？そんな…莫迦な…！！」
地面に転がる死体を目にした途端、頭の中が混乱し始める。
そんな己に追い討ちをかけるように…某の掌が血で真っ赤に染まっていた。
「てめぇは犬士として生を受けた故に、人として歩んでこれた…。しかし、只の人間に戻れば…こうなるのも時間の問題って事だ」
「な…に…！！？」
動揺する某に、近づきながら語る狩辞下。
「俺達鬼は力が強くても唯一、人間より劣っている事が一つある。…それが、数だ。故に、子を成す以外で絶対数を増やすために…何をしたと思う？」
そう語る奴の表情は狂気に満ちていた。
「…てめぇのように、“同胞になれる資質”を持つ人間を探し出し、“こちら側”に引きずり込む事…だ」
「！！」
耳元で囁かれた瞬間、全身に鳥肌が立ち始める。
また、それと同時に目を覚ますこととなったのである。
夢…

目が覚めた時、某は全身に汗をかいていた。どうやら、夢を見てうなされていたらしい。
何という不吉な夢――――――――――――だが、奴の申していた事が誠なれば…話の筋も通っておる…
起き上ると、夜明け前だったのか東の空辺りから陽の光が少しずつ入ってくる。そして、何か思い立った某は、すぐに出かけられるよう身支度をし始めるのであった。

信乃…。狭子の事は頼んだぞ…
朝方、馬を引いて城を出ようとした矢先…一足先に馬にまたがり、滝田城を後にする信乃の姿を目撃する。その真剣な眼差しから、「一人で来い」と敵に言われたのだろうと某は感じていた。そして、親兵衛の愛馬・青海波（せいかいは）に負けぬ大きさを持つ馬にまたがり、某も城を後にしたのである。
“資質”とやらで己の身が危うくなるだけならまだしも…もし、あの時のように仲間達に危害が及ぶ事になれば…某は…！
馬を走らせながら、某は庚申山で化け猫に襲われた時の事を思い返していた。その時、自分が持っている“鬼の気配を察知する能力（ちから）”が働いていたが故に、本来の敵である化け猫の気配が掴めず、狭子を危険な目に遭わせたという現実が、現八にまとわりつく。

そうこう考えている内に、某は安房国の霊山・富山の麓まで来ていた。
奴は、素藤に仕える忍…故に、この周囲にいると思われるが…
馬にまたがりながら、周囲を見渡す。この山は年々霧がかっていて、少し回りが見えずらい。狭子を攫った素藤は信乃に「富山へ来い」と言われたらしい。故に、奴に仕える狩辞下もこの山の周囲に潜んでいると、某は目星をつけていた。
「！」

登山道らしき道を少し逸れて進んでいくと――――――――――――――――
某の肉体が2つの気配を察知する。
一人はわかるとして…もう一つの穏やかだが、ひしひしと伝わる禍々しいこの“気”は…
周囲に気を配りながら進む某の視線の先に、2人の人影が見える。
「それにしても、素藤(やつ)は何故、あの小娘にあそこまで執着するのやら…」
「さあ…。ですが、あの娘を守るようにして彼らが這いずり回るのは、見ていて飽きませぬな…」
そんな会話をしていた二人の人物――――――――――――――――蟇田権頭(ひきたごんのかみ)
素藤(もとふじ)に仕える忍・狩辞下と、漆黒の着物をまとう鬼・牙静だった。
「…狩辞下、“はぐれ犬”が一匹、迷い込んだようですね」
「！！」
牙静が横目でこちらを向いた際、心臓を一掴みされたような気分がした。
どうやら、某の存在を少し前から気が付いていたようだ。
もとより、隠れたままでいるつもりは毛頭なかったので、某はすぐに彼らの前に姿を現す。
「てめぇか…」
顔をニヤニヤさせながら狩辞下がこちらを眺める。
「犬塚(かれ)信乃の助太刀にでも参ったのでしょうが…この先は、如何なる者も通すなと素藤様に命じられている故…」
「あの白髪の鬼に用はない」
牙静が淡々と語るのを制止するかのように、某は言い放つ。
「ほう…。では、“里見の姫”を助けに参じたのではない…と？」
「わしが今日、ここに出向いたのは…そこにいる狩辞下。そして、貴様ら鬼に用あっての事だ」
敵の問いに迷いなく答える現八。
その様子を目の当たりにした彼らは、少しの間だけ黙る。
「…どうやら、あの夢を見れたようだな」

「！？」
最初に沈黙を破った狩辞下が呟くように口を開く。
「夢…だと！？」
「…ああ！俺様は生き物の無意識化に干渉し、特定の夢を見させる能力を持っている。蒼血鬼は皆、人間を含む生き物の“脳”とやらに干渉できる能力を有しているって事だ！」
「…」
彼らの話を某は黙って聞いていた。
　あの夢が、仕組まれた事だと…！？そういえば…
某は昨晩見た夢の事を考えながら、ふとある時の事を思い出す。
「…因みに、わたしは人間の“記憶”に干渉し、その者が見聞きしたものを意のままに操る能力を有します」
「！！」
まるで自分の心が見透かされたかのように、牙静が口を開く。
「という事は…」
この時、某が思い出したのは荘助を迎える少し前、狭が申していた“身に覚えのない傷”の事だった。
「本人もお気づきのようですが…そう。最初にあの“里見の姫”の右腕を傷つけ、血を戴いたのはわたしなのです」
「そういう事か…！」
淡々と語りながら、不気味な笑みを浮かべる牙静。
こちらから訊く前に、彼ら自身が己らの事を語ってくれたため、憤りを感じながらも耐える事に成功する。そして、拳を強く握りしめながら、重たくなった口を開く。
「一つ…申しておこう。某は…どうやらそこにおる狩辞下が申すように、“鬼となり得る資質”を持つ人間らしい…。だが…」
この時、某の脳裏には素藤や目の前にいる彼らがこれまでにした所業が浮かんでいた。
「犬士としての役目を終えて只の人間に戻ったとしても…貴様ら鬼の手に堕ちる気も、鬼となって生きるつもりも毛頭ない…！」

そう言い放つ某の鋭い視線が、２人の蒼血鬼を睨みつける。
その様子に少し驚いたのか…表情は変わらずとも、眉を少しだけ動かす牙静。
「くくく…はっははははははぁ！！」
笑いを堪えていたのか、狩辞下が突然笑い出す。
「…何が可笑しい」
苛立ちを覚えた某は、鬼の忍びを睨みつける。
「そりゃあ、笑いもするだろう！！俺らの同胞になるより、脆弱な人間のままで生きる事を望むんだからな！！」
「…」
特に何も感じなかった某は、反論する気は全くなかった。
否――――――――それは、某の心に一切の迷いがなかったからなのかもしれない。
「確かに、貴様らの同胞となれば、人より優れた能力を有し、おそらくは寿命も延びるであろう。…じゃが、弱く儚き人の子故にできる事もある」
「はん！弱くて醜い人間なんざに、何ができる？」
鼻につくような台詞を並べる狩辞下は、どうやら人間に対して嫌悪感か何かを持っているように見える。
「人は他人を憎んだり見下したり…醜くて不完全な部分は多い。…じゃが、人を慈しみ、愛し守る事ができるのも人間…。故にわしは、この安房国が戦のない平和な世であり続ける様を見届ける使命があるのじゃ。例え、犬士としての役目を終えて只の人に戻ったとしても…！」
そう語る某の言葉には、２０数年生きてきた分の言霊がつまっていた。
それは、犬士と知るより昔…人の子がどれだけ愚かで醜い生き物である事をよう知っているが故の言葉だった。
曇りのない眼で睨みつけられ、狩辞下は少しためらい、牙静は呆れ果てたようにため息をつく。

「…本来なら、この場で八つ裂きにしてやりてぇ所だが…」
「…場所と分が悪いようですね」
「…？」
彼らの台詞に首をかしげていると、某の懐が蒼く光り始める。
「これは…！」
懐に入れていた“信”の字が浮き出る水晶玉を取り出すと、淡い光が宿っていた。
…信乃に何かあったのか？それとも…
某の胸中には、今もこの富山の何処かにいるであろう信乃の顔が浮かんでいた。
しかし、この玉にある“信”の字は…
水晶玉を見た時、この“信”の字は「他人（ひと）を欺かず」以外にも、もう一つの意味があるのではないかと思い始める。
「信念…」
玉を見つめていると、自然にその言葉が浮かんできたのだ。
「…はん！てめぇもまだ、“犬の証”を持っているし、ここが霊山だからってのもあるが…」
「…今宵は貴方の相手をする暇はなさそうですね」
「！！」
そう告げたか否や、彼らの姿が消えていた。
あまりにもあっさりとした退散に、某は呆気に取られていた。
…あのような事を申したら、某を始末しようと襲い掛かってくるやもと思うたが…
彼ら蒼血鬼の気配が２つ消え、安堵する現八。そして、しばらくはその場に立ち尽くしていたが…最後、少し遠くから感じていた巨大な“気”が消え、空に蒼き光が現れたのを確認した後――――――――――某は富山を後にした。

その日から数日後…我ら八犬士と狭子は皆で富山にある伏姫の墓

参りへと向かった。そこで黙祷を捧げると、某の頬にある痣や、皆が持つ牡丹花の痣が消え失せた。この現象を目の当たりにし、やっと犬士としての役目を終えたような…清々しい気持ちになれたのである。

こうして、里見家の家臣として神余城と兵衛府（＝皇居の外門の警護と皇族のお供をする役所）での官位を賜った。また、里見家八姫の一人たる栞姫（しおり）と夫婦（めおと）となったのである。狭子との出逢いによって女子嫌いが治り、他の女子とも普通に接する事が叶ったのである。妻となった栞（しおり）は、武芸の腕はなくとも、文才に優れた娘だ。

“武芸のできる女子”となると…やはり狭の事を思い出してしまうな…

ついついその顔を思い出す己に、クスッと某は哂っていた。そんな某の手には書物を書く筆が握られていた。この時、某は己が犬士である事を知り、信乃達と共に戦い、生き抜いたあの頃の事を文にしたためていたのである。犬士としての役目を終えた某。“鬼になり得る資質”を持つが故、まだこれで終わったわけでもない。いつ狩辞下たち鬼が襲い掛かり、己に災いが降りかかるかもわからない…。しかし、里見家の家臣ではる“人の子”として生きる限り、皆を慈しみ狭や犬士（かれら）と共に生きれるこの地を守っていこう――――――――――――某の胸中は、そんな想いでいっぱいであった。こうして、後に己が信乃達と共に仙人となりて富山に消えるまでの数十年間、安房国に平和が続いたのであった――――――――――――

最終話　”人”としての信念（後書き）

如何でしたか。
今回、久しぶりに原作『南総里見八犬伝』でも出てきた物などが描けました！
どれだったかおかわりでしょうか？
因みに、親兵衛の愛馬だという青海波も本当に彼が愛用していた馬の名前。資料によると、当時９～１０歳くらいの親兵衛が乗っていたのもあり、大型の馬だったそうです。
また、栞姫が文才に優れてたり、現八が賜った官位についても資料にありましたが、長くなりそうなのでここでは省略。

さて、この回にて現八編は終了！
そして”犬”編はとりあえずここまでとし、次は”鬼”。もっとも、これによって書ける登場人物は一人だけですが（笑）
どんどん、本来の八犬伝の話からそれていきますが…”外伝”なのでご勘弁を★
ただ、今回のように話の随所で資料にあるような八犬伝に出てくる物や事象についても少しずつ触れていこうかなと思ってますので、今後ともよろしくお願いします。
ご意見・ご感想をお待ちしてます！
それでは（＾＾

プロローグ3（前書き）

外伝3つ目は、犬士達の敵・蟇田素藤（ひきたもとふじ）の物語です！

プロローグ3

「会えるといいな！その、琥珀って娘(こ)に…」
文明八年（＝１４７６年）、今のような台詞を屈託のない笑顔で申していた男が死んだ。その男の名は、染谷純一。安房国・富山で見つけたその者は、本人曰く「５００年以上先の世から来た」という。僅か１年ほどのつきあいであったが…俺が生きてきたここ２００年分よりも充実した気分を味わえたのを覚えている。

その純一からは、今までに聞いた事のない不思議な時代が先の世にあること。そして、俺が愛した娘が申していた事と似たような事を申していた。その娘こそ、後に俺が愛した女・琥珀の生まれ変わりであり、里見家の姫として先の世から舞い降りたとわかる三木狭子という女子であった。
あの娘と巡り合ったのは、単なる偶然か何なのか…。知る術はないが、もしかしたら死ぬ間際でも「逢いたい」と願っていた純一(やつ)の想いが天に通じたのやもしれぬ…。
これは、俺の名を蟇田権頭素藤(ひきたごんのかみもとふじ)と改めさせる程影響を与えた青年・染谷純一と、里見の八犬士共と行動を共にした娘・三木狭子という“先の世から来た者達”と俺との関わりを記した、過去の物語――
――――――――――――

プロローグ３（後書き）

いかがでしたか。
随想録第３弾は、犬士達の敵であり、主人公ともかかわりの深い蟇（ひき）田権頭素藤（たごんのかみもとふじ）の物語で！
今回の外伝を書くきっかけ（本当のきっかけは第４弾の方ですが）の一つでもあった今回。ただ、信乃編より長くなるのはまずいかな～とか思いながら書いていく事になりそうです★

さて、プロローグの段階でちょっと補足。狭子の幼馴染・染谷純一が死んだ文明８年とは、ちょうど犬江親兵衛が生まれた翌年なんです！なので、彼の生まれた年が純一と素藤が出逢った年といったかんじかな？
この時系列は単なる偶然ですがね（笑）
てなわけで、随想録第３弾、いおいろまとめながら書くので、よろしくお願いします（＾＾

第1話　純一の話を聞いて

長禄(ちょうろく)二年（＝１４５８年）――――――――今思えばこの時、安房国・富山で目撃した出来事が、真の意味で“全ての始まり”だったのかもしれない。俺の目に映ったのは、小太刀で腹を一突きにして自害する人間の女とそれに付き添う男。もう一人いたのは、すさまじい邪気の感じる女の悪霊だった。

ん…？

その場所で起こっていた出来事を木陰から眺めていた際、ふと背後から視線を感じていた。俺はゆっくりと振り返ったが、そこには誰もいなかった。

気のせいか…それとも…？

振り向いた途端に消えた気配について考えていた折、俺の後ろでは蒼い光を発した８つの玉が天高くに舞い上がり、四方八方へと散って行ったのである。これが後に現れる“里見の八犬士”が誕生した瞬間であった。また、この時感じた気配の正体も後に判明する事と相成る。

それから１７年程の時が経った折、俺は染谷純一(そめやじゅんいち)と名乗る男と出逢う。平安の世から５００年程生きてきた俺にとって、これまでの年月はとても退屈な日々が続いていた。愛する女を失った事で、生きる事に希望を持たなくなった日々。しかも、蒼血鬼の中でも長命であった俺は、永きに渡る寿命を持て余していたのである。しかし、この時以降、良い退屈しのぎに恵まれていたようだ。

「お前の髪って白髪というより、白銀色ってかんじで綺麗だな！それ…地毛なんだろう？」

とある古寺で語り合っていた際、純一がそのような事を申していた。安房国・富山で見つけたその男は、初めて相まみえた際は異人のように変わった着物を身にまとっていたため、ひどく驚いたのを覚え

ている。だが、人間と同じ黒き瞳を持つが…蒼血鬼として恐れられてきた俺を真っ直ぐな瞳で見つめてくる。そこには負の感情はなく、ただ興味関心にあふれていただけだったのかもしれない。
「自我を持ち始めた頃からこの色だった…奇妙か？」
「別に！俺のいた時代には、黄金みたいな色や炎のように真っ赤な髪色をした奴がわんさかいるぜ！」
「ほぅ…」
純一は本人曰く、今より５００年以上先の世から来たという。
最初は戯言かと思ったが、話を聞くにつれそれが誠である事がわかる。
「今から５００年もすれば…お前や琥珀が申していたような“未来”とやらが訪れるのか…」
「琥珀…？」
遠くを眺めながら呟く俺の台詞に、純一は首をかしげながら言葉を紡ぐ。
この時、俺の脳裏には明るい陽射しの中、琥珀と語り合っていたあの頃が浮かんでいた。
「…俺が好いていた女の名だ。今はもう、この世にはおらぬがな…」
「…」
皮肉を込めた笑みを浮かべながら、俺は語る。
その様子から何かを察したのか、男も黙り込んでしまう。少しの間だけ沈黙が続いたが…幾何かの時が過ぎ、奴は何事もなかったような口調で話を切り出す。
「俺も今、逢いたい…って思う女、いるぜ？」
「…？」
純一がこの時、少し憂いを帯びた笑みを見せたのを覚えている。
見えているようで見えていない、どこか遠くを見つめているような奴の瞳を見ていると…まるで姿見の中に映る己を見ているようであった。
「物心ついた時から、同じ施設で育ち…」

純一は何かを言おうとしていたが、俺の顔を見て何か思い出したような表情をする。
「…15になるまで同じ手習い所で育ち、幼馴染…まぁ、俺にとっては妹みたいや奴だったのかもな」
「…お前が逢いたいと願うは、その娘か？」
「…ああ。俺が同じ高校の定時制に通い始め、昼間は仕事をしていたから…ここ2・3年は会っていない」
途中で俺にも通じるような言葉を紡いだが、結局は聞き慣れぬ言葉の連続であった。
そして、その後も奴の語りが続いた。幼き頃から同じ釜の飯を食ったというその娘――――――――三木狭子（みききょうこ）と名乗る娘は、歴史…すなわち、我々が生きた時代や過去における日の本の政治や文化を学ぶ事が好きな娘だという。また、この世界には「南総里見八犬伝」なる書物に出てくる人間たちが実在する、パラレルワールドという摩訶不思議な世界ではないかという仮説も立てていた。
「お主が俺の前に現れたように、その娘も時代（とき）を超えて現れたら…面白いやもしれぬな！」
「…まぁ、ある意味な！でも、余計なちょっかいは出すなよ？」
“ちょっかい”…？」
相変わらず聞き慣れぬ言葉を発する純一に、俺はただ聞き返す事しかできなかった。
すると、奴は頬を少しずつ赤らめながら口を開く。
「その…。俺はあいつの事…す…好いているからさ…」
俯きながら呟く純一（やつ）を見た時、この男は“三木狭子”という娘に惚れているのだと気が付く。
「…俺は、琥珀以外の女になど興味はない。故に、貴様から奪うつもりもない」
そう静かに答えると、純一は安堵したような表情（かお）を見せる。
この会話をしてから数か月後、蟇田権頭素藤（ひきたごんのかみもとふじ）と相成った純一は、不

治の病によってこの世を去る。人間の死など琥珀の時以来まったく感じていなかったが、この時だけは違った。奴は男子(おのこ)ゆえに“好いていた者”ではないし、人間なので同胞にもあらず。だが、俺の中にある心の臓に穴が空いたような虚無感を感じたのである。今思えば、俺が生涯で唯一、“友”と呼べる存在だったのやもしれぬ。
また、後に純一が申していた「三木狭子」という娘と相まみえる事になろうとは、この当時は微塵も考えていなかったのである。

やはり、あの娘は琥珀の…
あれから2年が経過し、文明十（＝1478年）年――――――――――俺は僕(しもべ)たる蒼血鬼・牙静(がぜい)や狩辞下(りょうじげ)らと共に、滸我(こが)で待たせている尼僧・妙椿の元へ向かっていた。道中、滝野川の弁財天・金剛寺付近で遭遇した娘…三木狭子の事を考えていた。純一と同じ“生徒手帳”なる物を所持し、蒼き光を放つという娘――――――その姿を見た時、俺は驚いた。着物から見て男の身にやつしているように見えたが、その顔は俺が愛した女・琥珀とうり二つだったのである。
『それ、確かに私の物です…。ありがとうございます！！』
満面の笑みを浮かべながら、俺から“生徒手帳”を受け取るその娘の声を聴いて俺は確信した。「この娘は琥珀の生まれ変わりである」と。その後、犬士共の邪魔が入った故に連れ帰る事は出来なかったが…去り際に純一の事をほのめかしたら、予想通りの反応をした。そして、その驚愕に満ちた表情をこの目で見た後、俺はその場を後にして現在に至る。
純一が申していた“里見の八犬士”とやらにも相まみえる事が叶ったし…これは面白くなりそうだな…
この時を境に、俺は如何にしてあの娘を手に入れようかと考えるようになる。また、行動を共にする尼僧・妙椿が安房の里見家を恨む人間の女・玉梓の怨霊である事も知っていた故に、今後もその尼僧

と行動を共にしてみようと改めて思ったのである。
「素藤様、如何されましたか？」
すると、牙静が突然俺に声をかけてくる。
「…さてな。それより、急ぐぞ」
「…御意」
この寡黙な鬼は、どうやら俺の表情（かお）を見て何か思う所があったのであろうが、俺は軽く受け流す。
しかし、この時俺は、己らを先導していた僕・狩辞下が独り不気味にほくそ笑みながら何か企てていた事を知らなかったのである。

「ほぅ…。では、奴らは神護鬼（しんごき）（＝神霊等が見える能力を持つ鬼）らと相まみえたと…？」
「ああ！」
それから数日後、俺はあの娘と共にいる犬士共の行動を探らせていた狩辞下から、奴らが上野国の荒芽山に住まう神護鬼・音音（おとね）に逢ったという報せを聞いていた。
「それに…犬共の中に一人、“同胞になる資質”を持つ奴がいたんだ！…面白くなりそうだぜ！！」
「…くだらぬ」
狂気じみた笑みを浮かべていた狩辞下を見た俺は、奴の言葉に対して何も感じなかった。
　ん…？
この時、僅かではあるが狩辞下（やつ）から血の匂いを感じる。俺らは蒼血鬼である故に、身体や口から吸ったであろう人間の血の匂いを感じるのは日常茶飯事である。だが、この時かいだ匂いは、見知らぬ人間の物ではない。その匂いは――――――――
「…狩辞下」
「あぁん？」
俺が奴の名を呼ぶと、不機嫌そうな表情をしながらこちらに振り向く。

「…貴様、あの娘の血を…食らったのか？」
「…！な、何の話だぁ？」
俺は鋭い眼差しで、群青色の髪をした同胞を睨みつける。
しかし、茶を濁すような口調で申す奴の台詞を聞いた途端、久しぶりに苛立ちを覚える。
「俺の命もなしに、あの“先の世から参った娘”を襲い、血を食らったのかと問うているのだ…！！」
今にもその心臓をえぐり取ると言わんばかりの形相をしていた俺に、たじろつく狩辞下。すると、観念したのか――――――――頭をかきながら口を開く。
「ああ！てめぇの言う通り…犬共が他の人間共と戦っている隙に、ちょっとな」
バシッ
奴が白状した直後、俺は狩辞下の頬をなじる。怒りの念も込めてやったため、奴の身体が地に落ちる。
「痛っててて…何しやがる！！？」
赤くはれた頬を抑えながら、奴は俺を睨みつける。
しかし、殺気だっていた俺はそんな瞳(め)に対してものともしなかった。
そして、奴の目の前まで歩いて行った俺は、その目の前で重たくなった口を開く。
「…あの娘は、俺の獲物だ。故に、今度俺の許しもなしにあの娘の血を食らったのならば…その首が胴体から消えてなくなるという事を、肝に銘じておくのだな…」
「…ちっ…」
そう言い放った俺は、奴に背を向けてその場を去っていく。
そんな俺を目の当たりにした狩辞下は、悔しそうな表情をしながら舌打ちをしていた。
俺も琥珀(あやつ)の血を味わったが…あの血は我ら蒼血鬼を夢中にさせる程の匂いを発するのは事実…
そんな考えが俺の脳裏に浮かぶ。それも含め、早くあの娘を手中に

納めたいと願う想いがより一層強くなるのであった――――――

第1話　純一の話を聞いて（後書き）

如何でしたか。
今回は素藤が長い時を生きてきたのもあり、里見八犬伝の前後がどのような時代だあったのかが年号でわかるかと思います。
もちろん、これは原作・『南総里見八犬伝』の時系列に沿って描いてますが…矛盾いている点は、今のところはない…はず？

今回は、彼のSキャラが存分に発揮されていたような（＾曲＾）
でも、書いていて思ったのは、何百年経っても一人の女性を愛しているなんて、この男もかなりすごいなとか考えちゃいました。自分でそう設定して書いたキャラなのにね。笑

さて、次回は『蒼き牡丹』では第６章以降の時系列で始まるかと思います！
同じ場面でも視点を変えると結構変わってくるので、彼から見た狭子や八犬士達の動きや表情をお楽しみください！
ご意見・ご感想があればよろしくお願い致します（＾＾

第2話　琥珀の生まれ変わり

ん…？

床に座って瞑想をしていた俺は、以前にも感じた事のある気配に気が付く。そして、その気配は段々と己のいる部屋の近くへと迫ってくる。俺はこの時、関東管領・扇谷定正の家臣である籠山逸東太縁連と共に、武蔵国にある石浜城を訪れていた。逸東太は石浜城の城主・馬加大記常武と話があるとの事で、俺は席を外していた。俺も最初だけ奴らの元にいたが、異様な眼差しでこちらを見つめる馬加を見た途端、悪寒を感じていた。それだけ、気色悪い人間である事を物語っている。しかし、そんな出来事を忘れさせるような出来事がこの後、起こった。

「…琥珀」

俺は瞳を閉じたまま、その名を口にする。

「無意識の内に言葉を引きずりだされた」と言っても相違ないやもしれぬ。それはかつて、琥珀が同じようにして俺の前に姿を現した時と同じような感覚であった故である。瞳を開いた俺は、“そやつ”に対して中に入るよう促す。そして、恐る恐る中に入ってきたのは、俺が欲している娘――――――――――――――――三木狭子であった。姿形は以前と変わっておらぬが、唯一違うのはその肉体が半透明であり、まるで霊魂のようにして立っていた事である。娘は俺が普通に話しかけている事が信じられないような表情をしていた。これは千里眼という「他の者には見えない遠くのものが見える」という能力の一種。狭子の場合、遠くにある肉体から精神だけがこちらに飛んできて、俺の目の前におるという事に他ならない。

この能力は…やはり、琥珀の名残であろうな…

俺は、己に触れられるか試している娘を見つめながら、そのような事を考えていた。

「ところで…何故、貴方はここにいるの？この前、私を連れ去ろう

としたのは何故！？それに、どうして私の事を“琥珀”って呼ぶの…？というより、“琥珀”って誰！？」
その後、危険がないとわかり腰を据えた娘は、俺に対して質問攻めを仕掛けてくる。
流石の俺もそういっぺんに答えるのは不可能に近い。故に、まずはこの石浜城におる所以を説明したら、すぐに納得したようだ。
純一が申していた通り…狭子（こやつ）は“歴史”なる物が得意なのだな…俺がこの場にいる理由をすぐに悟った娘を見た時、俺は染谷純一の事を思い出していた。
そして、僅かな時間を会話して過ごした後、対牛桜（たいぎゅうろう）と呼ばれる桜閣にて馬加が宴を開く事となり、俺と逸東太が招かれる事と相成る。
おそらく、この後の展開を知っておったであろう狭子も、気が付けば後ろから着いてきていたのである。

「ほぉ…」
その後、対牛桜でとり行われた宴の場にて、馬加が殺される場を目撃する。その男を討ち取ったのが、女田楽の花形・旦開野（あさけの）と名乗る女子。否、馬加を討ち取った際に誠の名を申したその者は男子（おのご）であった。見た目は女の出で立ち故に男子には全く見えなかったが、犬（い）坂毛野胤智（ぬさかけのたねとも）と名乗り出た際、声をよく聞くと男子である事がようわかった。
「成程。馬加に近づくために、女子の格好をしていたようだな…」
俺はこの犬士は智に長けた男だと思い、刃を交えてみたいとこの時は考えていた。
犬士の一人であるが故に、少しは手ごたえがあるだろう――――――――と、そのような思い込みがあった。しかし、狭子の制止を振り切って交えてみたものの…所詮は人間。詰らぬ結果で終いになりそうだった。しかし、馬加の家臣共が集まり、逸東太が逃げうせたのを目の当たりにした後、己もその場を去った。
「近い内に、また会おう。…琥珀」

俺はその場に立ち尽くす狭子とすれ違った際、一言だけ小さく呟く。そしてこの時、琥珀ともこのようなやり取りがあったなと考えながら、俺は石浜城を後にした。

「素藤様…ご命令通り、“先の世から来た娘”を捕えました」
「！」
石浜城での一件からどのくらいの月日が経ったか覚えておらぬが、ある時…逸東太に護衛として付き従ってきた牙静が何かを担いだ状態で俺の前に現れる。琥珀の生まれ変わりたる狭子と出逢ってから後、牙静には「折を見て“先の世から来た娘”を無傷で捕えて連れてこい」という命を下していた。あれから、関東管領が足利成氏との和睦をさせるための裏工作を進めたり等でせわしなくしていた故に、最初に命令を下した時からかなりの日数が過ぎていた。そんな牙静が担いでいたのは、紺色の着物を身にまといし娘・三木狭子であった。意識を失っておるのか、その大きな眼が閉じられていた。
「…本来は己のみの際に使う術ですが…此度はその娘を巻き込んで姿を消した故に、衝撃で意識を失われたのかと…」
「…相わかった。この娘はただの人間…術に耐えられぬのは致し方ない」
牙静は真面目な男ゆえ、地に跪いて謝罪をしていた。
奴が語るには、犬士共の前から姿を消す際、この娘を拘束した状態で移動の術を使ったが故に意識を失ったという。俺はこやつが偽りを申すような男でないのを存じているが故に、何も怒る事はなかったのである。
　やっと…やっと、お前を手に入れる事が叶ったぞ。琥珀…
俺は牙静から気絶した娘を受け取り、その腕で抱きあげる。細くて華奢なその肉体は、鬼の力を持ってすれば、その場で砕けてしまうような人間らしい儚さを感じる。俺は、この古き寺の供物を供える場所であった所に娘の身体を寝かせる。そして、左手で狭子の頬に

ゆっくりと触れる。そこから感じたのは、我ら蒼血鬼にはない“温もり”であった。
「琥珀…」
俺は娘の頬に口づけを落とした後、そこから首筋にも口づけを落とす。
しかしこの時…俺の脳裏には、掴まれた腕から逃れようと強気の口調で言い放つこの娘の顔が浮かんだ。
「素藤様…。まもなく、妙椿が戻って参ります。早くその娘を縛りつけないと…」
「…わかっておる」
その後、俺を諭すかのようにして牙静が口を開く。
　この続きは…琥珀が目を覚ました後…だな
フッと哂いながらそんな事を考えた俺は、娘の身体を再び抱きかかえ、寺の柱に縛り付ける。始めに手首を縄で縛った後、柱にくくりつけるまでの作業を俺が行った。本当ならあの続きをやるのに人目は全く気にならぬ性分だが、今は妙椿と手を組んでいる身。その尼僧も捕えたかったというこの娘と俺が顔なじみである…という事実は知られたくなかったからである。
その後、琥珀も目を覚まし、妙椿が娘に妖術で犬士共の会話を聴かせる。これによって娘は、己が行方をくらましていた里見家の姫・浜路(はまじ)姫である事を知らされるのであった。
　…確かに、富山で見かけたあの女とも似ている節が…
驚きの余り言葉を失っている琥珀をしり目に、俺は琥珀の実の姉であり、八犬士の生みの親・伏姫の顔が浮かんでいたのである。また、それと同時に純一が申していた「狭子が『里見八犬伝』の浜路姫にそっくり」という台詞に深く頷けたのである。
　…鷹に攫われて行方をくらました後は、何故か“先の世”にたどり着き、１０数年をその地で過ごした後にまたこの時代に舞い戻る…。誠に、『里見八犬伝』とやらに現れる同じ名の姫と同様、数奇な運命を辿っておるのだな…

目には見えぬ運命(さだめ)とやらに翻弄される琥珀に対して俺は、不思議な気分に陥っていた。

その出来事の翌日――――――――

「…私を、犬士達(みんな)の元へ帰してよ…！」

その日、俺と琥珀の2人きりという時があった。

だが、一度手中に納めた獲物をすぐ逃がす程、俺とて莫迦ではない。いくら娘の訴えであっても、それだけは聞き入れる事はできぬのである。

従順であっては、詰らぬからな…。やはり、この娘は強気な表情の方がそそられる…

俺は恐怖を必死に隠しながら己を睨みつける娘の顔を見つめながら、心の底からそう思っていた。故に、無理やりでも奪い取りたいという衝動にも駆られるのである。そうして俺は強引に娘の唇を奪う。拒絶される事も予想はしていたが…どういう訳かそのような気配はなかった。おそらく、狭子の中におるであろう琥珀の魂が俺に反応したのやもしれぬ。

琥珀…俺は今でも、お前の事を…！

娘が抵抗できぬ事を知っていた俺は、更に厚い口づけを求める。ほんの少しの間だけ、時が止まったような感覚がした。最も、俺は「このまま時が止まってしまえば」と考えていたが、そのような願いは叶わなかったのである。

「こんなの…悲しすぎるよ…」

「…！？」

唇を離した後、一筋の涙を流しながら申した言葉に、俺の表情が強張る。

永き時を生きてきた俺は、滅多な事で驚いた顔はしなくなっていたのに…この時、琥珀が申した予想だにしていなかった台詞に、驚きを隠せなかった。また、その後の言葉によって俺は己が琥珀を傷つけていた事を悟る。俺とした事が、娘が過去世(かこせい)（＝前世）の己であ

る琥珀の事を思い出してほしい一心でやった事が裏目に出た瞬間であった。
そして、娘の頬をつたう涙を指ですくった時…琥珀とはまた異なる愛しさを、俺は感じていた。

そしてその後…詫びの意も兼ねて、俺は娘に純一の遺品たる“生徒手帳”と奴が直筆で記した書物を見せた。そして、知りたがっていたであろう俺と染谷純一という同じ“先の世から来た者”の関わりを琥珀に語り聞かせたのである。かつて琥珀から多くの語りを聞いていた俺が、今度は生まれ変わりたる狭子に語り聞かせる事になろうとは、当時は微塵も考えてはおらんかった。純一が記したその書物には、『南総里見八犬伝』とやらのおおよその内容がびっしりと書き込まれていた。しかも、今を生きる俺でも読めるように記されていた所を見ると…おそらく奴は書物に精通していたのがよくわかる。その後、俺の口から純一の死を知らされた狭子は、かなり動揺していた。
「原作と同じ展開にならなかったとはいえ…。もう二度と会えないなんて…！」
そう嘆く娘の瞳は、再び潤んでいた。
悲しみに満ちたその表情に、俺の心の臓が強く脈打つ。
「琥珀…。俺の前で、そのような表情(かお)をするのならば…」
「…？」
俺はこの時、如何なる言葉を紡ぎだそうと考えたが、一つだけ“泣き止むだろう台詞”を思いつく。
「…柱にくくりつけられている縄だけほどき、この場でお前を襲うやもしれぬぞ？」
「なっ！！？」
娘の耳元でそう囁くと、目を潤ませていた狭子は途端に頬が熱くなる。
「…冗談だ」

恥ずかしがる娘の表情に満足した俺は、フッと哂いながら耳元から口を離す。
そんな事もありながら、俺は狭子が逃げぬよう見張る役目を一時だけ忘れて、多くの事を語り合っていたのである。
だが、この後…里見の犬士共が思わぬ形で狭子を奪い返しに現れる事となるのであった。

第2話　琥珀の生まれ変わり（後書き）

いかがでしたか。
今回は作者の書きたい事づくしで埋まった回でした。笑
また、素藤編は3回でまとめる予定でしたが…この調子でいくと、
本当に3話分でまとまるのかなぁ？という不安が…
お気に入りキャラの一人のため、キーボードが進むのなんのなかんじです！

さて、予定では次回で終わりのつもりでしたが…果たしてまとまるのか？
狭子の前世・琥珀自身の事や、信乃との一騎撃ちも極力書きたいので、いろいろ試行錯誤繰り返しながらまとめていきたいと思います！
ご意見・ご感想がありましたら、よろしくおねがいします★

最終話　”温もり”を得た己のゆく先は（前書き）

素藤編はこれが最後です。

最終話　”温もり”を得た己のゆく先は

琥珀…お前は、何故…！

あれから数日が経ったある日、俺がその場にいなかった時に犬士の一人・犬江親兵衛仁（いぬえしんべえまさし）と名乗る童が侵入。鬼の娘と共謀し、琥珀を連れ出してしまう。その場には狩辞下もおったが、その童は我らの弱点を把握していた事もあって、見事に取り逃がしてしまう。その報せを聞いた俺は、すぐに奴らが向かうであろう方角へ移動した。

「放してよ…！」

やっとの思いで見つけた娘は、俺を見てすぐに逃げ出そうとする。それに対して俺は、どこにも行かせないつもりで娘の身体を抱きすくめる。だが、それでも尚、俺の腕から琥珀は逃れようとするのである。

「思い出せ、琥珀。俺と共にいたあの頃を…！」

俺が耳元にて吐息混じりで囁くと、娘の身体が飛び跳ねるかの如く震える。

「貴方が…貴方が、妙椿と手を組み…犬士達（かれら）の敵でなければ…私は…！！」

その反応と共に放った台詞は、過去世（かこせい）である己――――――――――――すなわち、琥珀としての記憶が少しずつ蘇ってきている事を示すのだと俺は悟る。琥珀を見つめるその眼差しも、自然と熱を帯びたものと変貌していた。しかし…

「狭っ！！！！！」

琥珀を抱きくすめている俺の目の前に、里見の犬士が現れる。

「…来おったか」

俺はこのひと時を邪魔された故に、殺気だった瞳（め）で奴を睨みつける。そして、琥珀も奴の名を叫んだ時…これまであまり感じた事のない憤りを感じた。

たかだか、”書物の中の人間”が、俺の女の心を奪っているとは

な…
この時、娘の目の前でこの犬塚信乃という男を斬れば、永遠に俺の女にできるやもしれぬと考えた俺は、奴からの勝負を受ける。最初は優勢だったが、思わぬ所で琥珀が止めに入る。
「鬼としての矜持を忘れ、そなたが狂気に狂う所など…私は見たくない…」
「！！」
背後から抱きしめられた事にも驚いたが、この台詞を聞いた時…何かを悟ったような気がした。
“狭子”であり、“浜路姫”たる“この娘”は俺にとって聞き慣れぬ言葉を口にする娘…。だが、この台詞は…！！！
何故かは解せぬが、狭子の中にいる“琥珀自身”が俺を止めようとしている事に気が付き、俺はとどめをさせなかった。そしてこの時、「娘がこの時代に参った目的」を果たすまでは、犬士共の元へ預けるのも一興なのかもしれぬという思いが目覚める。故に、琥珀の事を狭子と割り切る事が叶い、犬塚信乃に一旦返す事ができたのである。

「牙静」
「…ここに」
琥珀の元を去った直後、近くに控えていた牙静を俺は呼び寄せる。
「奴らの事はともかく…俺の女を連れ出したあの小娘に、罰を与えねばな」
「…と申しますと？」
「“先の世から来た娘”を逃がしたままでは、妙椿の怒りも納まらぬであろう？…故に、あのくの一を始末してこいという事だ」
「…御意」
命令を下した後、牙静は姿を消した。
琥珀を連れ出した小娘――――名など知れぬが、あの双子は神護鬼・音音に仕える忍として名が知れており、我ら蒼血鬼とも何度か刃を

交えている存在。故に、一匹でも仕留めれば、音音(あのおんな)の守りを薄めるだけでない一石二鳥であるという考えから、牙静に抹殺を命じたのである。
結局、牙静が手を下す事なくその娘は死に絶えたらしいが――――――――――――如何に同胞であっても、敵対している同胞に対しては何も感じない己であった。

「お主と初めて相まみえた時も…このような夜であったな…」
この台詞は、俺が狭子と共に安房国・富山で一夜を過ごしていた時に口にした言葉。
純一が書き記した書物にある“関東大戦”という人間の戦が終いになったのを知った俺は、犬士共の目の前で、娘を連れ去る。全ての決着をつけるため、犬塚信乃には“一騎討ち”をほのめかし、この地を訪れたのである。
　この地が、純一の申していた“始まりの地”…。全てを終いにするにはもってこいの場所であろうな…
そんな事を考えながら、俺は眠りにつく娘の髪に触れる。俺が連れ去るまで床に臥していたと思われる狭子は、肌襦袢を身に着け、安らかな表情で眠りについている。当人は知らぬようだが、この襦袢は伽をする際に女子が身に着けるもの。故に、俺はかつて琥珀と肌を重ねあわせた夜を思い出す。
「…ぁ…」
「…？」
すると、突然、娘の口が開いて何かを呟くように口を動かす。
　寝言か…？
瞳は閉じたままだった故に、俺は寝言を呟いておるのかと考える。
「…そなたと一緒ならば…私に恐れる事は…何もない」
「…！」
この寝言を娘が口にした途端、俺はあの夜の事がまるでつい先ほど

の事のように蘇る。
同時に、“琥狛”として過ごしてきたあの日々をこの娘は夢で見ているのだと悟る。
「あの夜…俺は初めて、人間という卑しいとしか思わなかった生き物には、“温もり”なるものがあるという事を…知ったのだ、琥狛…」
そう呟きながら、狭子の華奢な肉体を抱きしめる。
その後、肌襦袢の内側に手を入れたりと、当人が目覚めないのをいい事に俺は好き放題して夜を明かしていた…。否、言いかえるならば、人間だけが持ちうる“温もり”を、狭子の身体を通して味わっていた己であった。

ザン…！！
その翌日――――――――――――――――――――刀が何かを斬る音が富山中に響く。
奴が富山に現れた後、愛する女をかけた戦いは終焉を迎える。そう、５００年以上に渡って続いた己による魂の旅がようやく終わりを迎えたのだ。
村雨丸とかいう犬塚信乃の愛刀たる刀に心の臓を斬られ、地面に倒れ伏す。気が付けば、頭上には琥狛…否、狭子の姿があった。
　この俺が、人間如きに負けるのか…。だが…
俺はこの戦いを通して…「この男になら、狭子を託しても違いないやもしれぬ」という事を悟っていた。そして、娘が犬塚信乃と共に生きる事が…娘の幸せであり、純一が望んだであろう事だとも考えていた。
「琥狛…。いや、狭子よ…」
「素…藤…？」
紅い血で濡れた己の右手で、娘の頬に触れる。
もう触れる事は叶わぬが…良い暇つぶしとなったな…

俺の腹部から血が滲み、止まる事なく出る故に…これが“死”である事を改めて実感する。
「…」
意識が朦朧とし始め、口もあまり動かせなくなってしまう。しかし、己の手を握りしめる狭子の手に気が付き――――――――――――それだけでも、とても満たされた気分になる。
「…来世でまた、逢おうぞ…。愛しき…娘よ…」
「…おやすみなさい…。素藤…」
そう囁く狭子の顔が一瞬、琥珀のそれと重なる。
ああ…必ず…
心の中で返事をした俺は、そのまま息を引き取るのであった。

こうして、“肉体の死”を迎えた俺は魂だけの存在となり、黄泉の国へと旅立つ。“三木狭子”と“染谷純一”なる2人の存在によって、生きる希望が湧き、死を迎える間近まで望むままに生きぬく事が叶ったこの短いひと時。これを大切にしながら、琥珀の元へ行こう――――――――――そう考えながら、俺の魂は何処へと旅立つのであった。

最終話　”温もり”を得た己のゆく先は（後書き）

いかがでしたか。
少し無理やり感があるかもですが、何とか3話分でまとめる事ができました！
第2話でやりつくした感が少しあるからうーん？なかんじです★

さて、次章は「犬鬼人」の”人”の部分を書こうかな～と。
ただし、これも書ける人物は早々いなかったりする。笑
おそらく…年内の更新はこれが最後かもですが、次章の構成もボチボチ練りつつあるので、今後もよろしくお願い致します★

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9061x/

犬鬼人随想録　～蒼き牡丹外伝～

2011年12月25日02時49分発行